

---

# 聖銀の姫君

柳沢紀雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖銀の姫君

### 【Nコード】

N7223F

### 【作者名】

柳沢紀雪

### 【あらすじ】

働くためにグラジオン王国を訪れた旅人デイレイアは、まだ幼い冒険者だった。デイレイアはその国でとある事件に巻き込まれる。王家の至宝である聖銀の紋章が盗まれ、その濡れ衣を着せられたデイレイアは、それを取り戻すために旅に出させられる。デイレイアの大いなる旅路はここから始まる。聖剣の姫君の書き直し。世界観はほぼ踏襲しています。

## 第一章 ミスリルの王国

薄暗い森の木々のトンネルを抜けて、少し霧がかった丘の頂上に  
出た馬車はそこから少しだけ方向を変えて、丘を腹ばいなるように  
下り始めた。

先ほどまで外には変わり映えのしない木々の海が広がっていたが、  
丘の頂上についた頃には眼下の城壁を見渡すパノラマとして雄大な  
景観を見せ始めていた。

港から半日かけて上り下りを繰り返した緩やかな山脈地帯はまる  
で自然の作り出した壁のように感じられた。

しかし、その終わりにそびえる城壁は遙か彼方地平線の向こう側  
までその身を横たえ、ディレイアにはそれがまるで大陸に横たわる  
大蛇のように感じられた。

グラジオン王国の国境を形作るその城壁は、『守蛇の門』という  
名を授けられている。

もしかすると、この城壁の命名者もディレイアと同じような感想  
を持ってその名をつけたのかもしれない。

しかし、ようやく国境の門へとたどり着いたにしては、その内側  
にはまだまだ深い森林が広がっている様子を見て、ディレイアは王  
都への道のりはまだまだ遠そうだと感じていた。

「ねえ、馭者さん。後どれくらいで着くのかな？」

ディレイアは幌の隙間から顔を出したまま、馭者台に腰を下ろす  
男にはじけんばかりの笑顔を向けた。

馬車の中には自分以外誰もいないせいか、ディレイアは短い旅中  
にもかかわらず、すっかり馭者と仲良くなってしまうていた。

「ああ、坊や。もう少しだから中で大人しくしていなさい」

まるでやんちゃな子供をなだめすかせるように目を細める馭者は  
幌から顔を出したディレイアの頭を何度かなでると、手綱で馬の調  
子確かめた。

ようやく緩やかな傾斜地に着いた安心からか、手綱から伝わってくる馬の感触は随分と落ち着いているように感じ、馭者は安心して手綱を握り尚した。

坊やと呼ばれたディレイアはすこしむくれた様子で、

「だから、坊やじゃなくてディレイアだって。それにボクはもう今年で一五歳なんだよ。もう大人なんだからね」

そんな幼子のような事を言うディレイアに馭者の男は声を上げて笑うと、

「だったら、もっと肉をつけて背をのばさないとな。そのなりじゃ女の子に間違えられても文句は言えんぞ」

「ボクだってそうなりたいと思ってるよ！　だけど、そうならないんだから仕方ないよ」

手を振り上げて抗議するディレイアだったが、馬車の車輪が少し大きな岩に乗り上げたらしく、急激に傾く御者台から振り落とされそうになった。

「おっと。ここからは難しい道なんだから、中で大人しくしてな。坊やって言ったのは謝るよディレイア。君は立派な旅人だ」

それがお世辞であることはディレイアは分かったが、今は馭者の邪魔をしてはいけないと思い、仕方なしに幌の中に引っ込んでいった。

ディレイアは閉ざされた幌から漏れ出る光に目を細めながら少し遠くへ目を向けるように面を上げた。

「旅人か。想像していたよりも簡単な事じゃないんだね」

そういつて彼女は全てが変わってしまった二年前の事を思い起こしていた。

「そうか。あれから二年も経つのか。早かったな、お母さんが死んで」

ディレイアが今の生活をするきっかけとなったのは、病弱だった母親が終に臨終して居場所が亡くなってしまったことに起因する。

近くに小さな村がある、少しだけ森に深い湖の近くの小屋。それ

がディレイアと母親の住まいだった。

母は元々その村の出身ではないらしく、仕事をもらうためにたびたび訪れていたその村の村人もまた母がどこから来たのか知らない様子だった。

「お母さんも結局死ぬまで話してくれなかったし。結局、ボクの生まれ故郷が何処なのか分からなかったんだよね」

だからなのか。母の死後、その村の村長がディレイアに、うちの子にならないか、と提案してきた時も、ディレイアはそれを断った。その村に不満があったのではない、村の人たちはみんなディレイアをよく扱ったし、まるで家族のように接してくれていた。

こんなに華奢で小さなディレイアに仕事を与えてくれていたのも、ひとえにその人達の善意だったと、今のディレイアには分かっていた。

それでも彼が旅を選んだのは、自分の生まれ故郷を探したいという一心だったのかもしれない。

それに、昔からの憧れだった。世界を旅する冒険者に。

だが、そんなディレイアに与えられた現実は無情なものだった。年端もいかない、まるで”少女のような”容貌のディレイアに与えられる仕事はほとんど言っていないほど存在しなかった。

それでもディレイアは必死になって働いた。

荷物運び、宿屋の下働きに定食屋の給仕。時には庭の草むしりや、迷子のペット探しとまるで冒険者には相応しくない仕事も嫌な顔をせずにがんばった。

それを二年間続け、ある程度の体力と僅かな蓄えを持ってディレイアはグラジオン王国行きのチケットを手に入れた。

グラジオン王国。世界に名だたる大国で、多くのミスリル鉱山と技術者を擁する国。

外から来る冒険者達の話の聞くにつれ、ディレイアは次第にグラジオン王国への思いが強くなるのを感じていた。

それに、最近になって発見された新しい鉱山を開拓するために今

では人手が足りないくらいだというらしいし、それがダメでもどこかの工房の下働きに入って手に職をつけてもいい。

そう考えたデイレイアは何の躊躇もすることなくグラジオン王国行きを決意したのだった。

それもまた冒険者らしくないことだが、そういう経験が今後の冒険者人生の何かの糧になるだろうという期待が膨らむむばかりだった。

デイレイアは逸る気持ちを抑えきれず、出港の日を心待ちにしていたものだ。

「それに、グラジオン王国の名前を初めて聞いた時。何故か、ここだって思っただんだよね。なんでだろう。この国がボクの生まれ故郷なのかな？」

デイレイアは様々な期待を胸に馬車の向かう先を思いやる。

そこに何があるのか知らず、それがデイレイアの運命を変えてしまふほどの大事件が待っていることも知らず。

馬車は平坦な道に出たのか、先ほどまで少しばかり傾いていた床は次第に平坦になっていった。

グラジオン王国は広い国土に豊かなミスリル鉱山を持つこの世界の大国の一つと数えられている。

しかし、この国を初めて訪れた者が、その国の成り立ちを聞くと大抵驚く。

それもこの国は建国から僅か四〇〇年程度しか経っていないのだ。この国は、世界の大国を見渡しても圧倒的に若い国に分類されるということに不思議な感触を持つのも当然といえば当然のことでもある。

それを聞かされたデイレイアもその例に漏れず驚いた表情を浮かべた。

早朝に港を出発した馬車が王国に入ったのは、太陽が沈み始める頃のことだった。さすがにこの時間になってしまえば鉱山の仕事募

集も終わっているだろうと思って詰め所に寄ってみたが、案の定宿直の鉦山夫から、

「今日の業務は終了だ、坊や」

と言われてしまった。

当然、

「ボクは坊やじゃない、デイレイアだ」

と言い返しておいたが、あの馭者のように笑って訂正してはくれなかった。

とりあえず、二、三日滞在できるだけの蓄えはあったので、城下の安い宿屋を探し何とかチェックインすることが出来た。

その宿屋は、食堂の運営も兼ねており泊まり客には比較的安い料金で料理を提供してくれるサービスもしており、渡りに船だと言わんばかりにデイレイアもそこで食事をとることにした。

ただ、狭い食堂のわりには客は多いらしく、相席をしている客もかなり見受けられた。

かくいうデイレイアも魔術師風の若い男性と相席することとなったのだが、少し居心地の悪そうなデイレイアにその魔術師が気さくに話しかけてきたところから会話が始まったという具合だった。

「この国つてもつと昔からあると思ってた」

ベルディナと名乗った魔術師風の男の口から流れるように紡ぎ出される王国の歴史に耳を傾けながらデイレイアはそう言葉を返した。「その誤解はよくあるな。まあ、だからこそ話の種としてはぴったりなんだが」

ベルディナはそういいながらグラスを傾けワインをグイッと煽った。

こんなと言っては失礼だが、大して立派でもないこの食堂でボトルをキープしている彼はどうやら店の看板役のようなものらしい。

そのためか、訪れる客からも気さくに話しかけられていた。

この人は、この店の人気者なんだとデイレイアは感じ取り、時々現れる彼の友人に軽く挨拶を交わすこととなった。

ベルディナは、ディレイアにもワインを勧めたが、一応未成年であるディレイアはそれを断り、代わりにベルディナは果実を搾ったジュースをディレイア奢った。

「それにしても、ベルディナさんって物知りなんだね。ひょっとして学者さんかなにか？」

奢ってもらった柑橘類の果汁をちびちび飲みながら、ディレイアは運ばれてきた前菜のあまりの味の濃さに目をしかめた。

「ベルディナでいい。さん付けは耳触りがよくねえ。まあ、学者に似たようなもんかな。日々、本と論文ばかりに目を通すしかない日陰もんだよ」

と言いながら豪快に笑う彼はどう考えても日陰者とは無縁だろうとディレイアは思うが、そんな彼がどうしてこんな所で食事をしているのかも気になった。

「ねえ、ベルディナ。ベルディナは、どうしてこんなところで食事を？学者さんならもつといいところで食べればいいのに」

少し失礼かなと思いつつディレイアはそう聞いてみた。

「ん？ 外で食べる料理なんて何処も似たり寄ったりだぜ？ ここはましなもんだ。それに顔見知りも多い」

そういうとベルディナは、今顔を見せた男と女のカップルに冷やかし混じりに声をかけると二人にビールを奢っていた。

人に奢るのはベルディナの趣味なのだろうか、さつきから誰彼かまわずに奢り続けるものだからディレイアは少しベルディナの懐が気になってしまった。

「気前がいいんですね。ボクにもこれを奢ってくれたし。いつもこうなんですか？」

「いつもってわけじゃねえな。まあ、高給もらってるわりには使い道がないんで、時々こうやって金を外に出すことにしてんのさ。微妙たるもんだがな」

多分、他の人からこれを聞かされるとむかつく奴と思って敬遠してしまうだろうが、不思議とディレイアはベルディナのその物言い



を好印象に受け止めていた。

「それにしても、味付けが濃いね。香辛料の使いすぎじゃないかな。それに少し焼きすぎな気もするよ」

ようやく顔を見せたメインディッシュの香草焼きにナイフを通し、フォークでそれを口に入れたディレイアは思わず口を閉ざしてしまった。

「お前は確か、スリンピアから来たっていったな。それならしかたねえな」

と言ってベルディナはスリンピア王国とグラジオン王国の食文化に違いについて少し話をした。

スリンピア王国はグラジオン王国の西に位置する大国だ。その王国は、西のユーネアル大陸を統一する大国で世界の宗主国と言ってもいい国だ。

スリンピアは国土が豊かで、温暖、湿潤と作物が育つ環境が整えられている。

さらに、その王都は海に面しているため、豊かな海産資源にも恵まれている。

だから、食に関しては非常な発展を極め、鮮度の良い食材が手に入りやすいことから味付けは薄く、その素材を生かした料理が発展したというらしい。

対してグラジオン王国はミスリル鉱山の豊富な国であると共に、その国土は農作には向かない痩せた土地が広がり、放牧が行えるほどの草原地帯も少ない。

局所的に深い森が点在することはあるが、そこから取れる果実もそれほど量にはならないし、質も悪い。

ただし、深い森であればあるほど良質な木材が取れるようで、それが造船、建築などの分野でミスリルに並ぶ外貨資源となっているらしい。

夏の厳しい暑さと乾燥が木々を締め付け、冬の比較的穏やかな寒さに抱かれ、それらが素晴らしい木材を作り出す原動力になると言

うらしいが、ディレイアにはその仕組みはよく分からなかった。

結局、建国以来この国は食に関して発展せず、食料もミスリル等の外貨で他国に頼るようになってしまったようだ。

「それも輸送するには防腐処理をする必要があつてな。そのため塩漬けの羊肉や、発酵した魚肉が大抵になってしまふわけだ。つてなわけで、この国の飯は味付けが濃くバリエーションも少ないって事だ」

ベルディナの説明は簡潔だったが、少し長く、聞き終わる頃にはディレイアはメインディッシュを平らげ、食後の珈琲をすすっているとこらだった。

ベルディナも話をしながらつつがなく料理を口に運び、空いてしまったワインボトルの代わりを持ってこさせていた。

「よう、旦那。今日は景気がいいですね。何かありやしたか？」

そんな深酒気味になつているベルディナにあやかろうとしたのか、まるで鉱山夫を絵に描いたような体格の男がディレイアの隣の席に腰を下ろした。

「よう、親方じゃねえか。最近忙しいらしいな」

親方と呼ばれた男は、ベルディナからワインをついでもらいながら少し肩を落としてため息をついた。

「全くそうなんですよ。最近新しく発見された鉱山が、これか思つたより深けえんですわ。そんだけいいミスリルがたくさん掘れるってことなんですがね」

「圧倒的に人手が足りねえってことか」

「それです。上からはさつさと調査報告をあげろって言われるし、他の鉱山からも人手を回すことも出来ねえですし」

「スリンピアにも求人を出したんだつてな。あれはどうなつた？」

ディレイアは自分とは関係ない話題だと思つて口を閉じていたが、スリンピアの求人と聞いて少し耳をそばだてた。

自分はまさにその求人を見てこの国に来たわけだから、それがこの国ではどういう扱いになつているのか気になつたのだ。

「ポツポツとは人は来るんですがね。やっぱり鉦山夫なんて仕事は人気かねえんですかね。全然足りやしませんぜ」

「だったら、今なら誰でも雇われるってことだよな？」

突然口を開いたディレイアに親方は少し驚いた。まさか、こんな細い子供が食いつくような話題だとは思えなかったからだ。

「ああ、まあ。やりてえってんならこっちは大歓迎だよ」

「良かった。ボク、鉦山で働きたくてここに來たんだ。ひよっとしたら雇ってもらえないかもって思ってた、それで安心したよ。出来れば明日から働かせてもらえないかな。朝はどれぐらいから？出来れば日当がいいんだけど、幾らぐらい貰えるのかな？」

これ幸いと言わんばかりに食いついてくるディレイアに棟梁は困った顔をして彼を止めた。

「まあ、待ちな坊主。働きたいってのはおめえか？ おめえの親父って事じゃなくて」

「うん。ボクの父さんは死んだらしいから違うよ。働きたいのはボクだ」

「んー、まあ、働きたいってんなら止めねえが……。正直よ、あんたでは無理だと思うぜ」

「ボクがちっこいからってこと？ そんなのやってみないと分からないじゃないか。こう見えてもボクは冒険者なんだよ。きつと何とかなるよ」

冒険者になってまだ二年目だけどねと言つ言葉をディレイアは飲み込んだ。

「んー。だがよう」

と煮え切らない親方にベルディナは「こうしたらどうだ」と提案することにした。

「明日、ディレイアを鉦山に連れて行って見学させればいい。そうしたら、鉦山がどれだけきついかつても分かるし、ひよっとすれば面白い一面も見えてくるかもしれねえだろ。鉦山で働くのは鉦山夫だけじゃねえ。それ以外の仕事もあるはずだ」

親方は暫く考え込むと、「分かった。そうしよう」と言って少し真剣な顔つきでディレイアを見た。

「明日の早朝。日が昇るぐらいの時間にきな。詰め所は分かるな？俺の名前、グレアを出せば通してもらえるようにしとく。それでいいな、ディレイア」

ディレイアにとっては渡りに綱のようなものだった。

「うん、分かった。ありがとう、親方さん」

「俺に礼を言うんだったら旦那の方にもしときな」

照れくさそうに鼻面をかく親方、グレアはどうやらこっぴどい面と向かって礼を言われるのにはなれていないようだ。

「そうだね、ありがとうベルディナ。ベルディナが言ってくれたお蔭だよ」

ベルディナはつまらなさそうに手をひらひら振ると、そのまま残ったワインを飲み始めた。

「それにしても、これはうまいワインですね。シュリバラント産ですか？」

「シリングバードだ。今年あたり飲み頃になりそうだったんであわてて開けに来たんだ。結構良いだろう？」

グレアは最高ですネと言うが、一口だけ飲ませてもらったディレイアにはこれの何処が美味しいのか、最高なのか分からなかった。

ただ、以前働いていた飲食店で覚えたワインの銘柄から考えるとかなり高級なものだと言うことだけはわかる。

こんなの金がかかるぐらいなら葡萄ジュースをたくさん買えばいいにと、少しぼやけてくる頭で考えた。

次第に回っていく世界に逆らうことなく、ディレイアはいつのまにか夢の中の住人になってしまっていた。

しばらく会話に花を咲かせていたベルディナとグレアだったが、テーブルに突っ伏して可愛らしい寝息を立てるディレイアを見て、少しほえんだ。

「眠っちまいやしたね旦那。この子の寝床は分かるんで？」

「この宿屋らしい。運ぶか」

次第に客足もまばらになって、食事客より酒目当ての客の方が多くなっていく食堂は、夕食時の混み具合から見ればずいぶん閑散としてきたようだ。

ベルディナは給仕を介して宿の受付を呼び出すと、ディレイアの部屋を聞き出した。

「それにしても、変わった坊主ですね、こいつは。こんななりで一人旅なんて、何か事情でもあるんですかね？」

ディレイアの肩を背負い込むベルディナを手伝い、反対側の肩を持ったグレアはその寝顔を見ながら呟いた。

「そりゃ、この歳で冒険者なんてやるんなら、ただでは済まねえぐらいの事情の一つや二つはあるだろうよ。あんたもそうじゃなかったのか？」

俺も人のことは言えねえけどなと口を嚙むベルディナを見て、グレアもまるで遠くを見つめるように、

「ええ、そうですね。詮索は無粋でした」

そう呟いた。

二人はディレイアを二階の客室の一番奥の部屋に送り届けると、ディレイアをベッドに寝かせゆつくりとシーツをかぶせた。

そのベッドのそばに置かれていたディレイアの荷物の中でもひときわ目につく小降りの剣を見て、ベルディナは溜息を一つつき、

「事情はあるだろうさ」

とのどを鳴らし部屋を後にした。

「さて、あつしはこれぐらいで帰るとしますわ。旦那はどうします？」

部屋のドアを閉め、階段を下り再び食堂に降りたグレアは一仕事終えたように腰を叩いた。

「俺は、もう少し飲むとするよ。ここの連中と会つのも久しぶりなんだね」

見ると、グレアにも顔なじみで飲み仲間の連中が店に顔を出して

いる。

グレアは少し後ろ髪が引かれるような気がしたが、明日も仕事があるといってその誘惑を打ち払うと、支払いを済ませて店を後にした。

季節は既に春の到来を告げているはずだったが、開かれた扉から一瞬流れ込んできた外の風はまるで木枯らしのように冷え込んでいた。

「今年の夏は冷えそうだな」

ベルディナはそう呟くと、給仕にウィスキーのボトルを一本注文するとそれを携え、彼を待つ者達の所へと歩いていった。

談笑しつつ、酔っぱらいの下品な物言いをたしなめつつ、その喧噪の中心にいるベルディナだったが、その脳裏にはディレイアが眠る最後に見せた表情がこびり付くように離れなかった。

（あいつとは初対面のハズだ。だが、なぜか懐かしいような感じがする。なぜだ、一体俺はあの表情の向こうに何を重ねているんだ）  
しかし、それは考えれば考えるほど深みへと誘われ、引っぱり出すことは出来なかった。

ベルディナはこの晩、何年かぶりになる悪酔いをしてしまった。

## 第二章 鉾山の祈り

「んつと……」

夢も見ない程に深い眠りから目を覚ましたディレイアは自分が寝かされている場所が何処なのか分からず、意識がハッキリとするまで周りをぐるつと見回していた。

ベッドの側に置いてあった自分の荷物を見つけてようやく合点がいったように何度かうなずいた。

「そつか。グラジオン王国に来たんだった」

そして、昨晚の夕食のことを思い出し、おもむろに窓の外を見やっ

った。

「まずい！ 遅刻する！」

臆気に思い出してきた昨日の会話では、グレアと名乗った鉾山の親方は確か、日が昇るぐらいに詰め所に来いといっていた。

窓の外に見えるグラジオン王国の山々からは、まだ太陽が顔をのぞかせていなかったが、徐々に白んでいく山の端を見ると夜明けまでそれほど時間はなさそうだ。

この国の日の出というのが何を基準にされているのかは分からないが、急がなければならぬことに変わりはないようだ。

「宿代は前払いだったし、朝食は……昼と一緒にいいや。後は……荷物も持っていこう」

昨晩は風呂にはいることが出来ず、長旅のすり切れたような臭いが身体中から漂ってくる。しかし、朝風呂をもらうほど余裕はないことはよく分かっていた。

取り敢えず下着だけ替えておこうと思い当たり、荷物からまだ汚れのついていない上下の下着を取り出すと、あわただしく服を脱ぎ捨てそれらを急いで付け替えた。

部屋の隅にある鏡台に浮かぶ自分の裸身を見みてしまったディレイアは、そのあまりの貧相さに溜息をついてしまった。

平らに近い胸元を被う下着など、自分には不要だと思いつつも、無いと先が服に擦りあわされて痛みを感じる。一時期包帯でも巻いてしまおうかとも思ったが、それはそれで何かを捨ててしまうような感じがしてとても嫌だった。

考えれば考えるほど溜息しか出てこないのに辟易して、背中に回した手でホックをパチンとはめ込み、さっさと上着を着てしまうことにした。

そうして何とか身支度を済ませ、荷物を入れた小さなリュックを背負うと、その側に立てかけてあった剣を腰に差した。

正直、これを帯びて町中を歩くのは気が引けるが、まだこれを預けられる場所がないため仕方がない。

街の骨董品屋の隅で見つけたなまくら剣だが、この剣のお蔭で何度も窮地を救われた。

買った当初はすいぶんこれを重く感じたが、今となっては手にも腰にも馴染む相棒として頼りに出来る。

デイレイアはそのまま部屋を飛び出ると、既に掃除をし始めていた客室係に軽く挨拶を交わし静寂に沈む町並みを急いだ。

王宮の朝は鉦山夫に負けないほど早い。夜も明けきらないというには少し大げさだが、少なくとも空が白み始める頃には徐々に人が起き出して宮殿の廊下を行ったり来たりし始める。

ベルディナもその内の一人だった。

「ベルディナ大導師、昨晩はすいぶん遅くまで飲んでいたらいいですね」

廊下ですれ違いざまに同僚から言われた言葉にベルディナは苦笑を返さざるを得なかった。

「たまには大目に見てくれよ、アグリゲット。こうでもしないと日頃の鬱憤なんて晴らせるもんじゃねえって、お前も分かっているだろう」

少しまだ酔いの残っている頭を振りながら、ベルディナは精一杯



皮肉を込めて肩をすくめて見せた。

「ええ、存じていますよ。別に咎めた訳ではないのです。ただ、あまり王宮で酒の香りを漂わせるのはどうかと思っただけですから」

同僚、アグリゲットの言葉を聞いて、ベルディナは、

「そんなに臭うか？」

と言いながら王宮勤めの証でもある灰色のローブに鼻を寄せた。

「もちろん、臭いませんよ。魔法薬の臭いがきつすぎて体臭さえも漂ってきません」

アグリゲットは珍しくまんまと引っかかってくれたベルディナに、これ見よがしに胸を張ると彼の隣に並んで歩き始めた。

「テメエも言うようになったな、アグリゲット。つい最近まで泣き虫小僧だったのがよく成長したもんだぜ」

「ベルディナ大導師。人の過去をむやみに持ち出すのはあなたの特権とはいえ、自重するべきだと思いますな」

ベルディナは豪快に笑うと、今後は自重しようと口先だけの約束を交わした。

「ところで、昨晚はずいぶんお楽しみのようにでしたが、何かあったのですか？あなたが泥酔するまで飲むのも珍しいと思いましたが」

アグリゲットは、議会に提出する書類を確認しながらふと、そう聞いた。

「少しおもしろい奴に会ってな。若い冒険者ってガキだったが、いい目をしていた」

アグリゲットは「ほう」と答え、

「若い冒険者ですか。最近はそのいう者が多いですな」

「世界がそれだけ揺れ動きつつあるってことだ。最近都市部でも孤児が増えてるって話じゃねえか」

「それが行き着く先は、その日暮らしの冒険者が、人身売買の商品か」

「嫌な話だ」

グラジオン王国ではまだその傾向が見られていないのはそれだけ

この王国の政治が上手くいつている証拠だと思いたいが、ベルディナは城下町を目にすると、その傾向が到来しつつある気配を日増しに強く感じるようになる。

「だがな、あいつはそういうのではないように思えるんだ。どちらかというと、希望に満ちている。今時珍しいガキだ」

ベルディナは酒場で出会ったディレイアのことを思い出していた。本来ならまだ遊び回っているか、親の仕事を手伝い始めているかの年頃だろう。

おそらく、両親は既に死別してこの世には居ないと思う。

それで冒険者の道を選ばざるを得なかった身の上に、彼が見てきた者達の多くは悲観的で、既に人生の絶望を味わい尽くしたかのような目をしていたが、あの子は全く違う。

悲観的ではなく、絶望もまだ知らないような無垢な瞳を絶やすことはなかった。あんな目をされて、鉾山の仕事を求めるのに親方はさぞ面食らっただろうなとベルディナは思った。

あいつがこれからどのような道を歩むのか、今日の昼あたりに抜け出して様子を見に行こうとベルディナは心の内に決定すると、アグリゲットを従えて会議場の前に立った。

さあ、面白味のない一日が始まる。その扉の向こうに立つ有象無象の連中をこれから相手にしなければならないと考えると一気に陰鬱な感情があふれ出してくるが、昼の予定を何とかして頭に思い浮かべることでようやく気休めにはなった。

「さあ、行こうぜ。俺達の戦場だ」

アグリゲットはその言葉に深くうなずくと、ベルディナに率先して会議場の扉を開いた。

詰め所に着いたディレイアは急いでそこに座っていた受付の男に話を通すと、受付の男は直ぐにグレアを呼び寄せてくれた。

「よう、来たな坊主」

顔をあわすなり気さくな笑みで迎えてくれたグレアにディレイア

は頭を下げると、

「遅れて申し訳ありません。それと、ボクは坊主じゃなくてディレイアです」

と言った。

「なに、鉱山の連中はみんなずぼらだからよ、こんな程度は遅刻にはいらねえよ」

がははと笑うグレアにあつとされながらディレイアはうなじをかきながら姿勢を正した。

「さてと、早速中にといいたいところだが、実は、急用ができちまつて案内ができねえんだ」

「ええ？」

流石のディレイアもそれには驚かずにはいらなかった。

「心配すんな。ちゃんと代役を立ててあるから」

と、ぽんぽんとディレイアの肩を叩くと、グレアは周りを見回して、これから鉱山に入る準備をしていた少年に目を付けた。

「おい。ロベルト、ちよつとこっちに来い」

ロベルトと呼ばれた少年は、その大声に目を白黒させながら周りを見回し、まるで飼い犬を呼び寄せるように手を振るグレアを見つけて、あからさまに嫌そうな表情を浮かべながら近付いてきた。

「と、いうわけだ。案内はお前に頼んだぜ」

ロベルトは、

「な、何のことですか親方」

と言いながら、怪訝な視線でディレイアを見回した。

「このディレイアに鉱山を案内しろってことだ。仕事現場をな、出来るだけ隅々まで」

簡単だろう？と言わんばかりの目でロベルトを見おろすグレアに、ロベルトは仕方ないなと溜息をつきながら、

「分かりましたよ」

と答えた。

おそらく、こういうやつかい事を押しつけられるのは初めてでは

ないのだろう。ロベルトの瞳の奥にはいやがりながらも、逆らっても無駄だという諦観の様子がありありと浮かび上がっている。

「まあ、若いもん同士上手くやってくれ。自己には気をつけるよ、それとあんまり奥には行くな。特にあの場所にはな」

グレアは矢継ぎ早にそう告げながらその場を走って去っていった。

「ねえ、グレアさんの急用って何なのかな」

ディレイアは姿を消してしまったグレアの方を見つめながらロベルトに聞いてみた。

「たぶん、上に呼ばれてんだろう。作業が遅いとか人手がどうか」  
ロベルトはあたかも面倒くさそうに答えながら、グレアに呼ばれて中断していた準備を再開させていた。

「昨日聞いたよ。人手が足りないんだってね。だから、君みたいな子供も働かされているってことかな」

確かにロベルトは見た目ディレイアより何歳か幼く見えるが、ロベルトとしては自分より華奢な体格のディレイアにそれを言われるのは酷くおもしろくない。

「お前だって子供だろう。まさか、この鉱山で働きたいなんて言わないだろうな」

「もちろん、そのつもりさ。そのためにこの国に来たんだから」

ディレイアは「えっへん」という音さえ聞こえてきそうな様子で胸を張った。

「やめといたほうがいいぜ、そんななりで鉱山夫がつとまるとは思えない。そう思ってるなら僕達を侮辱してる」

ディレイアはそんなロベルトの様子に「ふーん」と感心したような声を漏らすと、

「ごめん。別に君たちを侮辱するつもりはなかったんだ。だけど、君もボクの力量を見ないうちから無理だって言うのはやめてほしいな」

ディレイアは実は意外に思っていたのだ。鉱山で働く少年といえ、大抵好きでもないのに働かされている場合や、誰かを養うため

に仕方なく働いているものだと思っていた。

ロベルトの最初の印象からは、彼はこの仕事に誇りを持っていないと感じていた。

しかし、彼はどうやらこの仕事に自分なりの誇りを感じているようだ。

そんな風に誇りを持てる仕事に従事しているのを見て、ディレイアは少し目の前の少年を尊敬した。

結局自分は、実入りのいい仕事としてしかこの鉱山を見ることができなかったのだから。

驚いたのはロベルトも同じだった。

「ああ、分かってくれたんならそれでいい」

ディレイアが今まであつてきた人間は彼の言葉を聞くとたいいていの場合、「ガキが何言ってやがる」とか、「偉そうなこといいやがって」という答えしか返ってこなかった。しかし、今彼の目の前にいる”少年”はそんなロベルトの言葉に、ある一定の敬意を払ってくれたように感じられた。

（変な奴）

と思いつながらロベルトはディレイアが今まで会ってきた者達とは何処か違う人物なのではないかと思うようになった。

ディレイアはロベルトが鉱山に入る準備をしている様子を、その一手挙動をつぶさに観察していた。

作業がしやすく、それでいて暗闇でも目立ちやすい色彩の作業服、頑丈なミスリルで作られた安全帽、踏ん張りやすい出っ張りが裏にいつぱい敷き積まれている頑丈そうな安全靴。

そして、長く頑丈そうなロープを左肩に巻き付け、右肩には木で出来た柄の先に鋭くとがった太い棒が埋め込まれた道具が乗せられている。

ディレイアにもロベルトがかぶっているものと同じ安全帽が渡され、鉱山に入る準備は整ったようだ。

「その剣、中では邪魔になるかもしれないから、詰め所に預けてき

たら？」

と言うロベルトにディレイアは、

「持つて行くよ。これとはあまり離れたくないんだ」

と答え、剣のグリップを持つと腰に結わえなおした。

ディレイアとロベルトの周りには二人と同様鉱山に入る準備を終えた鉱山夫達にわかに集まり始め、それぞれ思い思いに談笑をしい、お茶を片手に今日の仕事の確認をし始めた。

昨日は西の方に掘ったが、あっちの方は固い岩盤で進みにくい。

あの先にいいミスリルがあるのは確かだから、今日は北から回り込んでみてはどうか。

いや、むしろ下の方から回り込んではどうだ。正面から掘ると堅いところにぶち当たるが、あれはどうもでつかい岩が一個埋まっているようにも感じられる。だったら、比較的柔らかい下の方から掘った方が効率が良いのでは。

だが、それでは万が一上にある岩が崩れ落ちたら助かりようがねえぜ。

じゃあ、上から。

そんな面倒な子とするぐらいなら素直に北から回り込んだ方がいい。それにそこから方々に発展して一石二鳥じゃねえか。

等々。端から見れば単に駄弁を洩しているように見える彼らも、仕事着を着てロープとピッケルを握りしめればその思考は完璧に鉱山夫のそれにシフトするのだろう。

そうして彼らがその命と人生をかけて掘り出した高品質のミスリルが世界中にもたらされ、人々の生活へとけ込んでいく。

それらの全てにはここにいる彼らの多摩市が吹き込まれているのだと考えると、ディレイアには埃っぽく、汗臭い現場にもなにか精霊のようなものがあるような気がしてくる。

「おい、あんた。ぼさっと立ってないで行くぞ」

ディレイアの物思いはロベルトの罵声によって遮られた。

ディレイアは、

「ごめんなさい、すぐに行きます」

と言ってロベルトの後を駆け足で追った。

「まったく、こっちは忙しいんだからな。しっかりしてくれよ」

ディレイアは年下の少年に叱られる自分を少し滑稽に思いながら、渡された安全帽のあご紐をしつかりと止め直しロベルトの隣に並んだ。

鉾山は岩山を切り取り、幾つかの道が造られていた。その道はそこより少しばかり小高い山の裾野まで伸びており、そこから更に幾分も分岐して道が続いている。

途中の分かれ道には第一鉾山、第二鉾山等とかかれた標識が点てられており、その数の多さから随分多くの岩山がこうして切り開かれていることが伺える。

ロベルトは中でも最も新しい数字があてがわれている第七鉾山の標識を目で追いながら、狭い道を時折すれ違う大柄な鉾山夫に道を譲りつつ、小石や砂利で滑る岩道を器用に歩いていく。

ディレイアもそれに負けじと歩調を強めるが、足の裏を時々突きかかる小石に何度も調子を崩されながら、気がつくとロベルトを見失いそうなほど遅れてしまっていた。

それでもロベルトを見失わないのは、彼が時折遅れるディレイアを待ちながら後ろを振り向いているためなのだろうか。

そのたびにディレイアは謝りながら、何とか目的の坑道へと到着することが出来た。

「ここが入り口になる。この先に第七鉾山があつて、途中で第五、第六鉾山に出る曲がり角がある」

ディレイアは、  
「へえー」

と歓声を上げながら、薄暗い坑道の先に目を向けた。

その視線の遙か向こうから僅かな光の一点が漏れ出している。あれが出口になるのだろうか。

それをロベルトに聞くと、彼は違うと答えた。

「あれは中継地点だ。鉱石を運ぶには広い通路が必要になるだろう。だけど、そんな広い通路を一から十まで掘ってられるほどみんな暇じゃないから、あそこみたいに途中で広場みたいな所を作るんだ。明るいのはそこだけ照明されているってこと」

ディレイアはなるほどと合点がいき、薄暗い坑道の壁に手をおいて先に進もうとした。しかし、ロベルトはそんなディレイアをにらみつけると強引に引き戻した。

「なに？」

「お祈り。今日初めてはいるからお祈りをしないとイケない。僕がやるようにまねてみて」

ロベルトはそういうと、ロープとつるはしを床に置くと、両膝を付き安全棒を脱いで自分の正面に置いた。

ロベルトがうなだれるように頭を垂れるのを見て、ディレイアも慌てて跪くとかぶっていた安全帽を置いて同じように頭を垂れた。

「鉱山の奥に眠る聖銀の主よ。私達はあなたの住まう山を削り、それを糧に日々を生きる者です」

ロベルトは横目でちらつとディレイアを見、ディレイアは慌ててそれを復唱した。

「どうか、これからあなたの住処に侵入し、それを踏み荒らす私達をお許し下さい」

所々舌を噛みながら一字一句丁寧にディレイアは祈りを捧げる。

「聖銀の主よ、私達は決してあなたの眠りを障げません。どうか、罪深き私達に慈悲の心を」

それは、鉱山に住まう神や精霊達に自分たちの愚かしさを告白し、自らの愚を知りながらもそれに頼るしかない事に許しを請う。そんな祈りの言葉だった。

「ルーヴィス」

サイリス教の聖句を最後に口にした二人はそのまま暫く頭を垂れ、ロベルトが立ち上がったところを見計らってディレイアも立ち上がった。



「これを一日、二回。仕事が始まった時と、仕事が終わった時に一回ずつするのがこの決まりだから」

ロベルトは安全帽をかぶり尚し、ロープとつるはしをまた肩にかけると、ディレイアを中へ案内した。

### 第三章 イグニス

坑道の中はやはり薄暗かった。しかし、どういうわけか松明が必要なほど暗いわけではなかった。

デイレイアはいち早く闇になれるように目を細め、その中でも一際暗い闇の一点を見つめ徐々にまぶたを開いていった。

まぶたを開けきったデイレイアの周りにはなにやら不思議な光景が広がっていた。

目が慣れるまでは薄暗いと思っていた坑道はどちらかと言えば薄明るいという表現の方があっているようにデイレイアには感じられたのだ。

「これは、壁から光が出てるのかな」

夜明け前の薄明よりも薄い明るみは、どうやらデイレイアがさっきまで手を置いていた坑道の壁面からもたらされているようだった。それはまるで星空を映し出す海面のようなボンヤリとした光だった。

鉱石の一部に自ら発光する物質が混ざっているのだろうか、デイレイアは軽く壁面をひつかいてみようとしたが、それはロベルトに止められた。

「それは魔光石。王宮の魔術師が作った光を出す塗料なんだ。とても貴重な者らしいからむやみに剥がしちゃダメだ」

冒険者として触り程度に魔術を知るデイレイアも魔力で光る魔導結晶があることは知っていた。という、これはその結晶を細かく砕いて膠にかわが何かで壁に塗りつけられているのだろうか。

見ると、その光は坑道の前面に敷き詰められているというわけではなく、あくまで壁の両脇の一部に人の通る道筋を描いているだけのようなだった。

だが、デイレイアは少し疑問に思った。一般的な魔術師が使う魔導結晶は魔力を通さないかぎりただの石と同じだったはずだ。

だから、魔光石を使用した魔導結晶も人が魔力を込めて触れないかぎりこんなにも断続的に光を発することはない。

誰かが定期的に魔力を補充しないかぎり、例え薄くはあってもすぐに光を失ってしまうことになるはずだが。

ディレイアが見る限り、誰かが魔力を補充しに回っている様子はなく、それで居てその光も一向に弱まる気配がない。

「となると、この膠なのかな」

砕いた魔光石の周りを埋める膠に何らかの仕掛けが施されており、そこを通る人間から僅かずつ魔力を吸い上げているのかもしれない。

「だけど、そんなの聞いたことないな」

壁面に向かつてうなり始めたディレイアにロベルトは呆れたように鼻を鳴らすと、

「おい、行くぞ。後がつかえてる」

といって少し強めにディレイアの肩を引っ張った。

後ろと言われてディレイアは振り向くと、二人の後方には既に荷車を引いた男達が数人たむろしており、ディレイアをにらみつけていた。

「ごめんなさい！」

思わず声を上げて謝るディレイアに、

「いいからさっさとしろ」

と苛立たしげに男達は答え、ディレイアとロベルトは少し早足で坑道を進み始めた。

「坑道で立ち止まっちゃダメだ。みんな忙しくていららしてるから、殴られても文句は言えないぞ」

薄明といってもハッキリと見えないロベルトの顔はおそらく、苛立ちと焦燥が入り交じったような表情をしているのだろう。

ディレイアはもう一度「ごめんなさい」と告げると、極力道の片側を開けながらロベルトの後に続いた。

自分の左腰に差された剣の鞘の先が時折側の壁にこすれてカチン

カチンと音を立てる。

この音も周りの人間は苛立ちの原因にならないかと思いつながら、今更ながら剣を詰め所に預けておけばよかったと後悔した。

それからしばらく二人は一言も言葉を交わすことなく、坑道の途中の広場を抜け、上に昇り下に下り、次第に自分がどれぐらいの高さを歩いているのか分からなくなる頃にロベルトは立ち止まった。

「ほら」

と言つて彼はその先を指さした。

気がつくとうつむいて歩いていたディレイアは、

「なに？」

と言いつながら面を上げ、そのまばゆい光に目が眩み、思わずでて視界を遮った。

真っ白に染まる視界だったが、しばらくするとそれも徐々に形のあるものに変じていく。

それが何か判別できるほどに視界が回復したとき、ディレイアは目を見開き、域を飲み込んだ。

鉱山を貫く坑道の先に広がっていたものは、まだ登り切らない太陽の光を身に浴びて悠然と広がる山々だった。

天を貫き、雲をその身に纏った巨身が互いに連なり、それはまるで大自然が生み出した巨壁のごとく大地を覆い囲んでいるようだった。

守邪の門と呼ばれたグラジオン王国の城壁もまるで大陸に横たわる大蛇のような雄大さがあったが、それも所詮は人が作り出したものに過ぎないと思えてしまうほど、その巨壁は偉大だった。

「あれがボルドーミサの先兵。あの向こうにある世界の巨峰、天嶮ボルドーミサを守る兵士だ」

ロベルトはまるで自分のことのように誇らしくそれを口にする。

ディレイアはただそれに首を振るだけで、言葉さえもその口から発せられることはない。

「本当は夜明けの時が一番綺麗なんだけど、その時間は鉱山も閉鎖

されて見られないんだけどね」

「だったら、何でそれを知っているのかな？」

デイレイアの悪戯っぽい笑みにロベルトは、しまったと言わんばかりに頭をかくと、

「一度だけ忍び込んだことがあるんだ。小さい頃だけだ」

デイレイアは、うらやましそうにそれを聞くと、自分もいつかそれを見てみたいなと思った。

ロベルトは下の作業場から昇ってくる男と挨拶を交わし、デイレイアに着いてくるよう誘った。

「作業場はあそこ。少し見えにくいけど、あそこから鉱山に入れる」  
ロベルトの指さす方には、片側に急な斜面を持つ通路のような先に、大きな岩の影に洞窟の入り口が見え隠れしていた。

ここから見ると、石を運ぶ鉱山夫がまるで岩から出てくるようにも見えて、デイレイアは少し頬をゆるめた。

デイレイアは少し肩に食い込み始めたリュックの紐を背負い直すと、先を行くロベルトを追い、さっきの坑道より少し入り口の広い洞窟へと足を運んだ。

洞窟から出てくる者はだいたい三つの人間だった。

一つは掘り進むことで発生する土砂や使い物にならない鉱石を捨てる人間、二つ目は算出した鉱石を下に運ぶ人間、そして三つ目は休憩のために外に出る人間だった。

通路ではない洞窟の中はかなり広く掘り進められており、その経路もまるでありの巢のように入り組んでいるようだ。

先ほどの坑道よりも中が明るいのは、魔光石が壁一面に塗りたくられているせいだ。幾分か発する光量が多いのは、単に純度の高い魔光石が使用されているのか、それとも魔光石の密度が高いのかのどちらかだろうとデイレイアは推測した。

珍しげに洞窟の壁面に目をやるデイレイアに、ロベルトは、

「少し前までは松明を使ってたんだ」

デイレイアは珍しく説明と注意以外に声をかけてきたロベルトに

目向けその言葉に耳を傾けた。

「だから、事故がよく起こったんだって」

「粉塵爆発だね」

デイレイアはその話をどこかで聞いたことがあった。

ロベルトは少し表情をかげらせてうなずいた。

密閉された空間に高密度の粉塵が舞い上がったとき、もしもそれに火種程度の小さな火がついた場合、その粉塵は連鎖反応を起こし大規模な爆発が生じる。

そのため、こういった鉱山では火の扱いには細心の注意が払われる。

「僕の父さんもそれで足を無くしたんだ。それで働けなくなって、代わりに僕が働くようになった」

デイレイアはただ一言、「そう」と呟くと、少し押し黙った。

「だけど、お亡くなりにならなくてよかったね」

親が死ぬことの辛さはデイレイアもよく知っていた。それはロベルトへの同情ではなく、単に自分のようになってよかったという安堵の言葉だった。

ロベルトはその言葉の向こうに、デイレイアは既に両親を失っていることを見つけ、その言葉が単なる同情からでた言葉ではないことを理解し彼は少し心が軽くなった気がした。

（不思議な奴だな。何で僕はこんなことを言う気になったのか）

笑顔を向けるデイレイアから少し視線を背けると、ロベルトは作業場へ案内した。

作業場の熱が外の熱と合わさって汗が噴き出すほどの熱気を纏い始める頃、不意にデイレイアの腹の虫が騒ぎ始めた。

ロベルトは笑って周りを見回した、そろそろ交代で昼食を取る時間のようなのだ。少し早い、そろそろ昼食に行くと仲間に伝える者もちらほら見受けられるようだ。

「昼飯を取ってくるよ。今日は見学だけど、たぶん貰えると思う」

デイレイアは少し頬を赤らめ、「ありがと」と小さく言っただけを見送った。

本当は作業の邪魔にならないように外に出ているべきなのだろうが、デイレイアはこの作業場をもう少し見学したくなった。昼食をとっていない作業員達はまだ身体を動かして労働に励んでいるが、既に彼らも昼休みの感覚なのか先ほどよりも幾分肩の力を抜いているように思えた。

「これなら邪魔にならないかな」

とデイレイアは思うと、ひとまずこの現場を指揮している様子の男に声をかけておくことにした。

「ねえ、もう少しここにいてもいいかな」

スコップを杖にして一息ついていたその男は、デイレイアを見下ろし、何でこんなガキがここに居るんだ、と言いたげな目を向けた。デイレイアが「今日は見学なんだ」と答えると、どうやらその話を聞いていたらしくその男は頷くと、

「まあ、かまわねえけど、あんまり奥には行くなよな」

「うん、お兄さんの目の届くところまでしか行かないよ」

さすがのデイレイアも、奥は危険だということはよく分かっていた。発掘作業中のそこからは、鉄で岩を削る音が絶えることなく聞こえてくるし、昼食時であるにも関わらず多くの者が忙しそうに入り込んでいる。

男、現場監督は、

「それなら自由にしな」

といって作業に戻り、デイレイアはぐるっと周りを見回した。ロベルトから誰が何の作業をしているのか一通り説明はされているが、その中でも気になったものが一つあった。

デイレイアは、広い作業場の隅に置かれた木箱に近づいていった。かなり大きな木箱で、その表面には「危険、さわるな」と記されている。中には、両側が細くとがらせてある小振りなミスリルの塊が幾つか収められていた。鉱山から出土した物に比べればそれは明

らかに人の手で精錬され形が整えられたものだ。

それが何か分からない者でもこれが何かの規格で作られたものだと言ふことぐらいは見当がつくだろう。

ディレイアはそれが何か知っていたため、その箱に記された言葉の意味も理解できていた。

「おい坊主。それは危ないものだつて書いてあるだろう。読めねえのか？」

今にもそれに手が伸びそうになるディレイアを引き留めたのは、さつきまで周りにいた作業員とは少し変わった服装をした男だった。その男は周りにいる者達とは違い、青ではなく赤を基調としたツナギに”発破技師”とかかれた腕章をしていた。

「ボクは坊主じゃない、ディレイアだ」

と言いながら、ディレイアは手を引つ込めた。

「だったらディレイア、それは危険だからさわつちやだめだ」

少し苛立たしげに男は伝えると、額からにじみ出た汗を拭いながらその木箱に手をかけた。

「それつて、爆発イクニスの魔導結晶スフィアだよな」

赤服の男はディレイアがこれを知っていた事に少し驚くと、木箱から手をどけた。

「何だ、知ってたんなら何でさわろうとしたんだ」

爆破イクニスの魔導結晶スフィア。それは、魔術を司る者にとっては実になじみの深いものだ。

「魔導結晶スフィアだつたら安全かなつておもつたから、つい。ごめんなさい」

赤服は、「ほお」と声を漏らしてディレイアをじつくりと眺めた。そして、ディレイアの容姿をみて彼女が冒険者だと言ふことに気づくと、「なるほど」と頷いた。

魔導結晶スフィアとは、100年ほど前に発明された技術だ。ディレイアが一時期働いていた宿屋で知り合った魔術師から聞いた話によると、それはそれまでの魔術の有り様を根底から変えてしまうほどのもの



だつたらしい。

今となつては古代魔術と分類される、所謂呪文や魔方陣等を用いた魔術はその習得に多くの時間と才能を必要とし、それが扱える者は魔術師として高い地位に就いていたらしい。

しかし、魔導結晶スフィアは基本的にはその行使に特別な才能も技術も必要としないものだ。

デイレイアが先ほど見た物のように、ミスリルなどの魔力伝導の良い金属の中にはガーネットやルビーといった宝石が埋め込まれている。

魔術の発動に必要な公式や術式は、全てその宝石に刻み込まれており、使用者は単にそれらに魔力を通じさせるだけでいい。

複雑な呪文もイメージも必要とせず、単にその発動に必要な魔力を注ぎ込むだけでいいそれらはそれまで魔術の知識の無かった者でも魔術師同様の力を与えることとなった。

そして、その性質は逆に魔力さえ与えなければくっついて魔術が発動しないという安全性をも持つこととなり、最近になってようやく社会に普及し始めることとなった。

「よく知ってるな。俺みたいな技師ならともかく、普通ならまだ見たことがないって奴も多いってのに」

「詳しい人に聞いたことがあるんだ。それにしても、爆発イグニスの魔導結晶スフィアなんて、何に使うの？　こんなところで使ったら危ないと思うよ」

デイレイアに少しだけ興味を持った赤服の男は、木箱のスフィアを一つ取り出すと説明することにした。

「発破イグニスっていつてな、人間の力じゃどうしても硬くて掘れない岩とかがあるだろう。その時はこいつで吹き飛ばしたりすんのさ」

手のひらでスフィアをもてあそぶ赤服の男の説明にデイレイアは納得したように手を打ち鳴らした。

「なるほど。確かにつるはしとかスコップじゃあ壊せないもんね。だけど、落盤とか崩落とかしたら逆に手間にならない？」

「そのための技師だ。俺たちは場所ごとにどれぐらいの爆破までな

ら安全だとか調べるのが仕事だから」

赤服の男はその仕事に誇りを持っている様子で胸を張り、ディレイアはそんな彼を尊敬の眼差しで見つめた。

「すごいね、どうやって調べるの？」

「そうだな、発破するポイントの周辺の岩の硬さとか、ハンマーで叩いた反響音で密度を調べたり。まあ、最終的には感だな」

「感？」

「ああ、師匠がやってるのを見て自分なりにいろいろ経験した感だ。最近ようやく感がつかめるようになったばかりだな」

ディレイアは「すごいね」と目を光らせ、赤服の男は照れくさそうに鼻を擦った。

「お前、ここで働くのか？ 発破に興味があるんなら俺の所にきな。さすがにやらせてやるわけにはいかねえがいろいろ教えてやるぜ」

「本当？ ありがとう」

赤服の男は、自分をアランだと紹介すると、暫くディレイアと話を続けたが、彼を呼ぶ声に返事を返し、木箱を持ってそのまま外へと出て行った。

「発破か。ボクはあまり力仕事は出来ないだろうから、そっちもいかな」

ディレイアはそう呟きながら、何気なくさっきまで木箱が置かれていたところに目をやった。

「あれ？」

そこには、白く光る塊が一つ、壁の隅に隠れるように転がっていた。それはさっきアランが運んでいったイグニスのスフィアと同じ形をしていた。

「箱から落ちたのかな」

危ないなと思いながらディレイアはそれをアランの所に持って行くこうと考えた。アランの話では、イグニスのスフィアは厳重に管理され、その個数が会わないと大変なことになるというらしい。

下手をすれば首になるぜと肩をすばめていたアランの姿を思い出

し、デイレイアは足早にそのスフィアの元に足を運んだ。

壁伝いに歩き、デイレイアはその一步手前で不意に足下に違和感を感じた。さつきまで硬質な感触のしていた岩床が、いきなりまるで粘度を踏んだ時のような感触に変わったのだ。

「えっ？」

デイレイアは思わず足元を見た。見ると、その足はまるで泥のような茶色いものを踏みしめている。そして、その泥のようなものはまっすぐと彼の目の前に転がるスフィアに伸びており、よく見るとそのスフィアはその泥に埋もれるようにそこに貼り付けられていた。デイレイアの背筋が凍り付き、身体が一気に緊張した。その泥はここに来るまで彼の周りにたくさんあるものだった。

これは、魔光石を包み込む膠にそっくりの者だった。そしてデイレイアは思い出した。この膠はひょっとして周囲の環境から魔力を吸収してそれを魔光石に提供する者なのかもしれない。そして、その魔光石がイグニススのスフィアに取り変わったとしたら、その結果は。

それに気がつき、踵を返そうと身体をねじったデイレイアだったが、それは果たすことが出来ず、彼女の視界は熱を帯びた空気の奔流と、鼓膜を打ち破るほどの轟音で遮られた。

衝撃が洞窟の壁床天井を反響させ、その衝撃波は小さな岩や土埃を圧倒的な速度で跳ね上げ、そのエネルギーは暴れ回る竜のように空間をかき回し、やがてそれらは出口へと誘われる。

幾たびも小さな崩落が起こり、出口を貫いた風圧はやがて山々の間を駆け抜け消えていった。

はらわたが煮えくりかえるかというほどの不快な会議を終えたベルディナは、中庭の休憩所の椅子に腰を下ろすと、そのままテーブルに突っ伏してしまった。

「お疲れ様です。大導師」

その隣では状況的にはベルディナと大同小異であるアグリゲット

が、水の入ったマグカップを彼に差し出していた。

「ああ、お前もな」

ベルディナは身体を起こしてそれを受け取ると、まるでやけ酒を飲むかのような塩梅でそれを一気にあおった。

いや、いつそのことこれが酒であればいいのにとベルディナは心の隅で毒づくと、空になったカップを乱暴にテーブルにたたきつけた。

「それにしても、予想通りというか予定通りというか。評議会は荒れましたね」

アグリゲットは先ほどまで自分たちが立たされていた会議場を思い出し溜息をついた。

「全くだ、チクショウめ。連中は何であも目先の利益だけに目を向けやがるのか。俺の提案が実現したら世界に革命が起こせるつてのを理解してねえ」

ベルディナはそういうと、テーブルを何度も叩いた。普段は温厚（というよりは調子が軽い）彼がここまで感情をむき出しにするのはよほどのことだとアグリゲットは感じた。

「まあ、政治というのはそういうものでしょうよ。特に金に関係する事ならあの者達も慎重になることでしょう」

ベルディナは「やってられねえ」とばかりに空を仰いだ。

王宮に属する魔術師である彼らは、実質的に行っているのは技術研究者と同じ事だ。

彼らは既存の技術を更に発展させると共に、新たな技術的課題に取り組みそれを現実の物とする事が仕事でもある。

この国で最も重要なことは、国益の半分以上を占めるミスリルに関する技術だ。ベルディナも他の同僚と同様、ミスリルの技術開発に多くの時間を割いている。しかし、そんな彼も許される時間と資金の中で一つの大きな技術革新の研究に打ち込んでいるのだ。

「魔法力機関スフィア・エンジンが現実の物となれば、世界の輸送交通に革命を起こすことが出来る。他の国ではいまだ手がつけられていないこの技術は

出来るかぎり早急に実用段階に持つて行く必要がある」

アグリゲットは評議会を説得させる度に口に出している言葉を呟いた。もう何度目になるのだろうか、既に彼はそれを一字一句違えることなく口に出来るほど、その言葉を言い続けていた。

「ようやく理論的に実現できる段階にまで漕ぎ着けたんだ。実証と実験のためにはその試作のための資金がいる」

「ですが、その資金が最低500万ソートに上るのであれば、さすがに評議会も躊躇するのも分かりますね」

「本当はその倍は欲しいんだがな」

ベルディナもアグリゲットにつられて溜息をつく、懐から煙草を取り出し指先にもした火でそれを噴かし始めた。

ベルディナが研究を進めている魔法力機関とは、現在この世界にあるどの動力ともかけ離れた全く新しい動力機関である。

現在世界を席卷している動力を三つほどあげるなら、それは風力と馬力と人力だ。船舶は歩に風を受け、人が動かすオールを動力とする。地上では馬車が殆ど唯一の交通機関であり、街中では人力で走る車が主流となっている。

そのため、船舶はその時の環境に左右され、風向きによって進むことが出来る方向が決められ、風力によってその速力が制限される。人力は安定した動力とは言い難く、場所と費用を必要とする。より強い速力を得るには帆の面積を大きくしその数を増やすしか無く、オールを操る人員を増員するしか他がない。そのため、どうしても船舶自体が巨大化し自重を増すこととなり、それに使われる素材もなるべく軽い木材を使用せざるを得ない。

しかし、魔法力機関は違う。  
スフィア

魔導結晶をその動力として使用するそれは、水中で水を前方から取り込み後方から噴射する構造をとっている。その前後で水流は加速され、その運動量の差額として船舶には動力が提供されるのだ。

それは風のご機嫌を伺う必要もなく、人が汗水垂らしてオールを漕ぐ必要もない。魔導結晶<sup>スフィア</sup>定期的に補給してやれば常に一定の速力

で船を進ませることが出来るのだ。

「魔法力機関の効率を上げるにはどうしても大型のものが必要となり、その建造には莫大なコストがかかる」

アグリゲットは彼らが抱えている唯一の欠点を口にした。

「だが、その資金さえあれば、夢の鋼鉄船をも建造することが可能となる」

鋼鉄船構想。あらゆる国がどれほど夢に見て実現できなかったことか。その夢が実現までもう後一步というところなのだ。ベルディナは自分の開発した魔法力機関を搭載した鋼鉄製の船が広い海原を悠然と航行している姿を思い描き、甘美な夢に浸るかのようにホッと溜息をついた。

それは彼のような技術者にとってまさに最上級の夢であるに違いない。その隣に座るアグリゲットも彼の想像の中に眠る未来の姿に酔いしれるかのように頬をゆるませている。

「実現できるようにがんばりましょう」

アグリゲットはそういつて立ち上がると中庭を後にしようとした。

「お前、この後はどうするんだ？」

ベルディナも彼と同様に立ち上がり中庭を後にする。

「私は、これから計算書を洗い直そうと思います。おそらくまだコストを軽減できる要素があるはずですから。何とか後100万ソートは安くできるようにして見せますよ」

「そうか、ご苦労だ。ただし、安全率は下げるなよ。それをしちまつたら魔術師を名乗る資格が無くなる」

「分かっていますよ。私も魔術師です」

ベルディナはアグリゲットの誇らしげな視線を心強く思い、

「そろそろお前に研究室を預けてもいい頃だな」

と呟いた。

アグリゲットは驚いたような様子でベルディナを見つめ返すと、照れたように頬を赤らめ、少しうつむいた。

「私などまだまだですよ。まだ、私はベルディナ大導師から教えを

授かりたいと思っています」

「後はもう経験を積むだけだとおもぅがな。頭の隅でいい、少し考えておいてくれ」

アグリゲットは困惑しながらも「分かりました」と一言伝え、ラボへと続く角に差し掛かり一礼すると、そのまま真つ直ぐラボへと向かっていった。

「さてと、俺は昼飯前に鉱山にでも行くか。親方に頼めば飯ぐらい用意してくれるだろう」

凝り固まった身体をほぐすようにベルディナは二、三度身体を伸ばすとそのまま白衣を脱いで脇に抱えるとそのままの足取りで自室へと向かっていった。

鉱山にたどり着いたベルディナはその騒々しさに眉をひそめた。

「おい、何があった」

彼に道を譲る者の中には下町の警備員の姿もあり、これはただごとではないと感じたベルディナはその一人を捕まえて事情を聞き出すとした。

「あ、大導師。ほ、本日はご機嫌も麗しく……」

自分呼び止めたものがベルディナだと理解したその者はしどろもどろになりながらも何とか対応しようとして舌を嚙んだ。

「挨拶はいい。状況を教えろ」

ベルディナの強い口調に男は背筋をただし、かみ砕くように状況を説明した。

「鉱山内で爆発事故？ スフィア 魔導結晶管理者は何をしていた？」

「それが、どうも不審な点が多いらしく、現在調査中でして」  
「場所は？」

「第七鉱山の奥の作業場です」

「最近、ジュエル・イーター 鉱石食いのおかげで見つかったというあそこか」

「は、はい」

そこまで聞いたベルディナは少し口を噤んだ。ジュエル・イーター 鉱石食いは鉱物を

主食とする魔物の一種で、その姿は巨大なミミズのような形をしている。

それは鉋山で働くものにとってはやっかいな敵であると同時に、彼らの出現する場所には高品質の鉋物が取れることから諜報もされている魔物だ。

グラジオン王国の鉋山夫にとってそれは鉋山の番人として恐れられており、聖銀の主の守手として信仰されているものでもある。

しかし、ベルディナはその鉋山を開拓するのには反対していた。

「（祭壇に近い。これはそれを狙う者の仕業か？）」

ベルディナは自分の危惧が外れて欲しいと思いながら、今回もあのときのような事件が起こりつつあることを予感していた。

ベルディナは面を上げ、しどろもどろになる鉋山の男に声をかけた。

「警備団長は来ているな？」

「は、はい」

「だったら、そいつを呼べ。祭壇の事について俺が話をしたいといえ分かるはずだ」

彼のいう祭壇は一般には秘密にされているものだ。事実、祭壇と聞かされて首をかしげる鉋山夫にベルディナは「早くしろ」と命令し、鉋山夫は「はい！」といいながらその場を後にした。

「杞憂であればいいんだ。そうすればこれは単なる事故で解決できる」

ベルディナのつぶやきは、混乱をきたす鉋山の中に儚く消え去っていった。



## 第四章 聖銀の祭壇

ディレイアは夢を見ていた。それが夢だと気がつくまで少しだけ時間がかった。

その夢はディレイアの記憶の中にあつて、今でも思い出す度に幸せと不幸せを運んでくるものだった。

（……お母さん……）

ディレイアは森の中に立てられた小さな小屋の扉を開け、小さな足を懸命に動かしそこに待つ愛しい人の胸に飛び込んだ。

「どうしたの？ 何か見つけたのかしら？」

母はそうやって笑うと、優しくディレイアの髪をなでつけた。その時は腰まで伸びていた彼女の紅髪は、透き通るような母の手に喜びを表すかのように、漏れ出る光の中で淡く輝いていた。

「えへへ。お母さんがいるから嬉しいんだよ」

まるで花が開くかのような笑顔で幼いディレイアは母親を見上げた。

「まあ、私もよ、レ……。私もあなたが居てくれて嬉しいわ」  
ディレイアは母が自分の名を呼ぶ事が好きだった。今は捨ててしまったその名を耳にして、ディレイアの胸には甘美な喜びと、小さな痛みを感じる。

母は幼いディレイアを床に下ろすと、もう一度頭をなでて、御夕飯にしましょうと椅子に腰をかけた。

「うん。私、お腹ぺこぺこ」

自分を私と呼ぶ幼いディレイアは、少し背の高い椅子によじ登るように腰を下ろすと用意されたナイフとフォークをつかんで母の料理が運ばれてくるのを待ちきれない様子で足をぶらぶらとさせた。  
（私はお母さんがいてくれて幸せだった。だけど、お母さんは？ お母さんは私が居て幸せだった？）

その風景はまるで風に流される紙の一片のように、その風景を切

り取り急激にディレイアの前から姿を消した。

（ボクはこの先を知っている、だけど”私”は知らない。ボクも”私”もお母さんがどんな気持ちだったのか知らない）

ヒタヒタという水の雫が漏れる音を耳にして、ディレイアはゆっくりとまぶたを開いた。

「ここは？ ボクは？」

身体を起こそうとしたディレイアは、体中を走る痛み思わず悲鳴を上げてうずくまった。

痛みのためにはつきりとしてくる記憶に歯の奥をかみしめ、身体を突き刺さる感覚をどうにか耐えながら視界を埋め尽くす闇の中に何とか壁の感触を探し出し、ディレイアはゆっくりと立ち上がった。意識の中に舞い込んでくる、夢の中の幼い自分をディレイアは何とかして打ち払うと、見えない手を何とか掲げてその指先に意識を集中した。

「……一握の光よあれ……」  
ライト

まるで絨毯についた一つの染みのように、闇に包まれた空間に一つの小さな光が生まれた。

古代魔術を源流とするその呪文は最も単純なものであり、現在も使う者はおおい。ディレイアは以前働いていた宿屋で出会った魔術師に感謝すると、その光を様々な方向に向けて自分が何処にいるのか確かめた。

「広い洞穴。自然に出来たものにしては随分と整備されているように見えるな」

上を見上げると、その遙か頭上に針の先ほどの光が見える。どうやら自分はあるそこから落ちて来たのだと知ると、よく無事だったものだと思いの頑丈さに呆れながらも驚き、ディレイアは身体から離れてしまった荷物を探した。

リュックも剣もすぐに見つかった。しかし、それらを詳しく調べたディレイアは溜息をついた。

「殆ど使い物にならないや。最悪だ」

リュックのそこからしみ出した液体は、魔物よけと怪我の消毒のために入れておいた蒸留酒だということにはすぐ気がついた。中で割れてしまい中身がこぼれてしまっていた。

お気に入りの鉄製の食器もベコベコになって役に立たないし、蒸留酒に浸されふやけてしまった包帯に換えのために数セット用意してあった白い下着にも茶色い染みがこびり付いてしまっている。

ディレイアを更に落胆させたのは、旅を初めたてで買った剣が鞘の中で曲がってしまい抜けなくなっていたことだった。こうなればもう鞘を割って中身を取り出すしか無く、取り出したとしてもここまで曲がってしまっていてはまともに振ることは出来ないだろう。

「お金もないのに、どうしよう」

剣は骨董品屋で買った中古の安物で、買った当時は錆びも入っていたが、それでも当時のディレイアにとってはけっして安い買い物ではなく、それは今になっても同じ事だった。

「これじゃ、戦えないよ」

ディレイアは仕方ないといいつつも涙目になりそうなまぶたを拭い、とりあえず虚仮威こけあどししだけにはなりそうな剣をベルトとズボンの間に差し入れた。

「お腹も空いたな」

ディレイアはリュックを探って非常食としてとって置いた干し肉を取り出し口に含んだ。干し肉は漏れ出した蒸留酒に浸されていたようで、肉の臭みは確かに消えているがその代わりに酒の独特な風味とアルコールの刺激臭が咽を貫き、思わずむせてしまった。

「うっ、ボクって不幸」

思えば好奇心で爆破の魔導結晶イグニス スフィアに手を出したのがけちのつけ始めだったとディレイアは後悔したが、今更何を言っても過去は帰ってこないと思い立ち、放っておけばあふれてくる涙の雫を強引にぬぐい去って、とりあえず行動を開始しようと思いついた。

本来なら、むやみに歩き回るのは良くないことだったが、ディレ

イアはどうもここにいていてもたってもいられない感じがした。  
何故か、心が沸き立つというのか、ざわめくと言うべきか。

指先の光を掲げて歩き出すデイレイアの歩調は何か引き寄せられるようにどんどん早まっていく。

「何だろう、胸がドキドキする」

早まる歩調に同調するようにデイレイアの心臓は次第に早鐘を強くしていくようだった。

（これは、緊張？ 期待？ それとも焦りなのかな？）

コツコツと、硬い靴の裏が奏でる音は静寂の闇に包まれた洞窟内に響き渡り、まるで質の悪い音楽のような響きをもって消えていくようだった。

道の先に一塊の光が見え始めた。

デイレイアは立ち止まり、手に持つ光を少し遮りながらそれを見つめた。

「出口かな？」

それはやけに明るい。しかし、太陽の光にしては何か光沢が変だ。デイレイアはつばを飲み込んで、後ろを振り向いた。

自分以外の足音がしたような気がした。デイレイアは一度、手の光を消すと目を閉じて耳に意識を集中させる。

「……気のせいかな……」

しかし、その耳に伝わる音はどこかで軽い小石が地面に落ちる音と、どこからか流れ出る水の雫の音だけだった。

デイレイアはもう一度踵を返すと、歩き出し、「そこ」に至った。

「え？ なに？」

そこに広がる光は太陽のそれに比べると幾分か穏やかで、手に持つ光の明るさになれていたデイレイアは急激に広がる空間にあっけにとられ、ただぐるっとそこを見回すより他がなかった。

そこは出口ではなかった。考えてみれば当然でもある。デイレイアが落ちてきた場所は標高が高いといっても山の裾からかなり入った場所であり、彼女が今まで歩いてきた道のりから考えればとうて

い山を抜けるほどの距離にはならないはずだった。

方向が分からないため、どうにも言えないが、ひよっとしたら出口を目指すどころか山のもっと奥深くに歩いてきていたのかもしれない。

しかし、そんな危惧や希望などは今のディレイアには全くの無縁であつたに違いない。

彼女は驚愕の表情で掲げていた腕を落とし、さっきまで闇を照らしつけていた手先の光を消し去った。

「祭壇？」

その光は、魔光石が生み出す光とはかけ離れていた。そして、それは壁から発せられるものではなく、その中心、何かを祭り上げる簡素な祭壇の奥からわき出しているように思えた。

木造の小さな祭壇は、まるで王宮を小さく縮めたような姿をしており、普段は閉じられているのであるうその正面の城門はまるで内側から押されたかのような形で開け放たれており、その奥にあるものの姿をさらしていた。

ディレイアがそれに向かってゆっくりと歩み寄っていったのはおそらく無意識のことだったのだろう。

「これが、紋章？ …… ボクの紋章だ……」

ディレイアは頬が熱い涙で濡れるのを感じた。それはまるで、何年もあえなかつた思い人とようやく再会できたかのような、ただ純粹な喜びだった。

徐々に伸ばされていくディレイアの腕は、後一步で紋章に指先が届きそうになっていた。

だから、彼女は気づかなかつた。そんなディレイアの後ろに忍び寄る黒い影に。

「…… あっ……」

それは一瞬だった。まるで無理矢理眠りにつかされるような、自分ではない誰かの腕に意識がすみ取られるような。

うなじに響く衝撃がなんなのか気づく前にディレイアはそのまま

床に倒れ込んだ。

「だ、れ？」

倒れ込んだディレイアの意識に呼応するように、その紋章は次第に光を失っていく。だから、ディレイアはそこに立って自分を見下ろしていた影の表情を伺うことが出来なかった。

「ご苦労だったな。眠れ」

それはどこかで聞いたような、まったく聞いた覚えの無いような声だった。まるで自分を物のように見下すその視線だけを感じ取り、ディレイアは再び白い意識の奥深くへと沈み込んでいった。

それより少し時間がたち、警備団長と幾人かの王宮騎士を引き連れたベルディナがその祭壇に足を踏み入れた頃、祭壇に安置されていたはずの紋章はその姿を消していた。

ベルディナは、

「チクシヨウ！」

と舌打ちし、そこに寝転がっているディレイアを見つけ驚いたような表情を浮かべるが、すぐに眉間にしわを寄せ、騎士の一人に命令した。

「聖銀の祭壇から聖銀の紋章が消失した。大至急国王に伝達しろ。早急に緊急会議を開く。関係者全員に招集をかける。」

そして、意識を失っているディレイアに鋭い視線を投げかけ、命令を受領し駆け足で立ち去った騎士とは別の騎士に向かって更に命令した。

「こいつは聖銀の紋章消失の重要参考人だ。とりあえず、牢にぶち込んでおけ。尋問は俺が行う！」

そして、行けというベルディナの言葉に呼応して騎士の何人かがディレイアを担ぎ込み、警備団長と共に祭壇を後にした。

祭壇に一人残されたベルディナは、トーチの光を祭壇へと向けそこにいる誰かに呟くように声を漏らした。

「また、なのか？ また、俺に背負えというのか？ メイガス。」  
誰も答えはしなかった。

## 第五章 大導師出陣

グラジオン王国の至宝、聖銀の紋章が消失したという知らせはすぐに国王の耳に入れられ、緊急対策会議には尋常ではない緊張が駆けめぐった。

事情を知る鉱山の関係者の何人かが仕事の最中であるにもかかわらず招集され、それを聞いた重鎮達は誰もが破滅の二言を口にした。ベルディナは苛立っていた、いや、もはや激怒していたと言ってもいいだろう。

対策会議のために集められたはずの重鎮達は、聖銀の紋章が何処に行ったのかということにはどうやらあまり関心がないようで、むしろこの責任は何処にあるのかという事に関心を持っているらしい。ベルディナはその隣に座るこの議会の主を横目で見た。

重鎮達よりも一段高いところにどっしりと腰を据えるグラジオン王国の国王、グリユート・デファイン・グラジオンはその威厳のある表情を一切崩さず、また一言も口を開くことなく押し黙っていた。（こりゃ、怒っているというよりは、呆れて物が言えんってかんじだな）

ベルディナは鼻を鳴らすと、つまらなさそうに椅子に背を預けて腕を組んだ。

「ベルディナよ、私にはどうやら人を見る目というものがなかったらしい」

それは沸き立つ議会においてはベルディナの耳にのみ届く程の声だった。ベルディナはにやりと笑うと、

「どうやらそうみたいだぜ。あいつ等は事の重要さが理解できてねえらしい。とんだ屑共を選んじまったみてえだなお前は」

その物言いは一国の国王に向けるべき言葉ではない。しかし、グリユートはそれを意に介することもなく深い溜息をついた。

「あのときと同じだ。私はこの場には居なかったが、おそらくそう

だったのだろう。父上は何も話してはくれなかったが」

グリユートは三十年前のその日を思い出した。自分には決して何も語られることがなく、沸き立つ王国の裏側を表に立ってただ見つめるしかなかったあの日、その傍らにいた兄も同じような表情でただ状況を伺うことしかできなかった。

「お察しの通りだ。だから、あのときは最悪の一步手前まですんじまった。もう、あのときの二の舞はごめんだぜ」

ベルディナにとっては立った三十年前に過ぎないことだった。しかし、人間というのは僅か三十年程度で教訓を無に返すことが出来るのだろうか。

三百の時を生きるエルフであるベルディナにとってはそのことがむしろ驚愕だった。

「また、そなたに頼ることになりそうだ」

グリユートのその言葉はまるで彼に許しを請うような印象を与える。

「まあ、最初から覚悟はしていたよ。出来れば辞退したい所だが、国王の頼みとあれば断るわけにもいかねえな」

ベルディナは腕を横に広げて肩をすくめた。だが、彼は分かっていた。おそらく、これが出来るのは自分だけだと。

嫌な予感のはたして全てが的中してしまったことに彼は溜息をつく気も起こらなかった。

「済まぬ」

グリユートは頭を垂れることなくそういった。

「一国の主がそうそう簡単に謝るもんじゃない。お前の親父は心の中ではそう思っていて口には決して出さなかったもんだ」

「兄上もそうだったのか」

決して表情を崩さず、不満も憤りも全てその内に秘める彼であっても自身の兄のことを思うとその抑制も効かせられなかったようだ。ベルディナは去ってしまった彼の国王のことを思い出し、目を閉じた。



「……さあな、忘れた……」

十五年前のあの日、彼は二人の大切な友人を失った。もう記憶の隅に閉ざしてしまいたいそれを思いベルディナもグリユートさえも押し黙るしかなかった。

「では、よろしく頼むぞベルディナ。必要な物は全て用意しよう。万事難なく執り行ってくれ」

「了解した、グリユート。少し荒々しくなるがな」

ベルディナは腕を組んだまま軽く頷くと一度だけ議会の推移を眺めると、組んだ足を持ち上げそれを強引に机にたたきつけた。

バーンという、まるで会議場に雷でも落ちたのかというその音に、さつきまで延々と不毛な言い争いを演じていた者達の全員がその音の原因であるベルディナのほうに目を向けた。

「テメエら、馬鹿騒ぎもいい加減にしやがれ」

水を打ったかのように静まりかえるそれらを見てベルディナは腹の奥底からわき上がるような低音を響かせ、彼らを威圧した。

「べ、ベルディナ大導師。陛下の御前ですぞ、馬鹿騒ぎとは失礼な

……」

「黙れ！」

まるで馬上から転げ落ち方のように狼狽する老人に向かってベルディナはただ一言でそれを黙らせた。

「さつきから聞いてりやどいつもこいつも自分勝手にいい加減なことばかりいいやがって。責任の所在は何処にあるかって？ そんな物は決まっている。聖銀の紋章の継承者である国王と、その管理を仰せつかっているこの俺だ。だったら、何故誰も俺たちを叱責しやうとしない。何故行く当てのない愚論で議會を混乱に陥れるのだ」

その言葉はまるで天から振り下ろされた鉄槌のようにそこにいる者達の全てを責め立てていた。

「しかしですね。」

「黙れといっているのが分からんのか！」

それを口にしたのはグリユートだった。そして、国王が黙れと言

う以上、彼はそれ以上の発言を続けることは出来なかった。

議会が完全に沈黙したことを受けて、ベルディナは話を続けることとした。

「当件の責任者である国王、グリユート・デファイン・グラジオンはこれに関して全ての責任を負うことに決めた。これは国王デファインの名における勅命である。」

ベルディナは机の上に置いていた足を元に戻し、組んだ腕をほどき、威風堂々と胸を張り、そして立ち上がり腕を掲げた。

全ての視線がベルディナが伸ばすの腕の指先一点に集中する事を感じ、ベルディナは宣言した。

「これより当件は我、ベルディナ・アーク・ブルーネスが国王の代理として全てを受け持つこととする。」

そして、ベルディナは席より離れ、段を下り、議会の中央、円卓の中心へと身を寄せ再び宣言した。

「大導師アークの称号ではいささか不安が残されると思う者もあるだろうが、出来れば了承していただきたい。了承の印は拍手を持ってそれを示して欲しい。不安がある者はこの場で名乗り出るがいい。私は喜んでそれに応答しよう」

ベルディナは議会の頂点に立つグリユートとその頭上に掲げられた王国旗に背を向け、かかとをならし背筋を伸ばした。

一瞬シインとなる議会だったが、誰かが打ち鳴らした拍手を拍子に、会議場はまるで振りしきる豪雨のごとき拍手の渦に包まれた。

グリユートはベルディナの背に向かって一度だけ深く頷く。

ベルディナはその拍手の全てを身に受け、まるで自らが国家の代表だと言わんばかりの足取りで真っ直ぐと進み、その先にそびえる会議場の扉を開け放った。

ベルディナの出室を見計らった近衛の騎士がそれを閉ざしても、その拍手はまるで扉の向こうにいるベルディナの出陣を後押しするかのようにに泊まる気配を見せない。

いまだ背後から響き渡る拍手の音を聞き、ベルディナは誇らしく

思うと同時に陰鬱な感情に沈み込む思いだった。

「安心しろ、同じ過ちはもう繰り返さない。だから、あまりつきまとうなよ、メイガス」

ベルディナは両手をスーツのポケットに突っ込み、少し肩をすぼめて身震いすると性急な足取りでその場を後にした。

扉の向こうの会議場は拍手ではない別のざわめきで包み込まれていた。

## 第六章 三度目の駆け引き

硬い岩の感触にディレイアは眉をひそめた。目を開くとどうやらそこは閉ざされた岩戸の中のようなだった。

ノイズが混じる意識を何とか奮い立て、ディレイアはゆっくりと上体を起こし、身体に異常がないかどうか何度か確かめて溜息をついた。

どうやら無事のようなだ。

それが分かったと次に襲いかかったのは身を貫くほどの空腹だった。  
「こんな状態でお腹が鳴るなんて、我ながら気楽なもんだな」

そういつつもある程度の緊張を取り除いてくれた無粋な腹虫に少しでも感謝しつつ、ディレイアは周りを良く見回した。

どうやら、今日はよっぽど洞窟に縁があるのだなと思いディレイアは悲観するよりも先に自身の数奇な運命に呆れてしまった。

自分が寝かされているのが硬い鉄格子に閉ざされた牢獄であると気づくのは殆ど時間を必要とせず、自分がどうしてここに入られているのかという理由も何となく理解できるだけにディレイアはむしろ落ち着きを取り戻した。

「あそこは、入ってはいけないところだったんだね」

ディレイアはあの場所のことを思い出した。まるで祭壇のような様相を構えたその場所は、おそらく誰の目から見ても神聖な場所だったのだらう。

そして、そこに安置されていたあの紋章のようなものは鉾山にとって、いや、ともすればこの国にとって大切な物なのだろうと予想がつく。

「だけど、ボクを眠らせたのは誰だったんだらう？ 鉾山の人かな」  
いや、それにしても格好が奇抜すぎた。真っ黒いマントのような物を身に纏い、黒い手袋に黒い靴、表情が伺えなかったのは黒い布で顔を覆っていたからだだったのかも知れない。

ともあれ、あれがいったい何だったのかデイレシアには想像さえもつかない事だった。

デイレシアはひとまず立ち上がり、腰を落ち着ける場所を硬い岩の床から粗末なベッドに移し状況の変化を待った。デイレシアはこの先について何の悲観もしていなかった。

爆発が起こったのは明らかに事故だったし、神聖な場所に足を踏み入れた事は確かだが、自分はすぐに眠らされてやましいことなどなにもしていない。

おそらく、あそこで何をしていたのか叱責されるだろうが、今までのことを丁寧には話せばすぐ釈放されるだろうと信じていた。

とにかくすぐにここを出たかった、早く仕事をもらわないとその日暮らしの路銀が底を突いてしまう。

「それにしてもあの爆発で良く無事だったね。あんまり強い爆発じゃなかったのかな。怪我人が出てないといいけど」

ロベルトが昼食を取りに行つてあの場にいなかったのがせめてもの救いだと思いながら、デイレシアは鉄格子の向こう側を伺った。

警備の人間は何処にいるのだろうか。デイレシアが入られた牢屋は、随分と奥の深いところにあるらしく入り口を固める兵士の姿も、入り口から漏れ出る太陽の光も伺うことが出来ない。

おそらく夕方近い時間帯なのだろうと当たりをつけたが、松明の光しかないここではそれを確かめる方法もなかった。

（せめてご飯ぐらい持つてきてくれればなあ。腹ぺこで死にそうだよ）

思い返せば、朝食を取れず、昼食もあれで食いつぶれてしまった今となってはこうやって起きていられることが不思議なぐらいだった。

「ねえー！ 守衛さんとか居ないのぉー！ お腹が空いて死にそうだよ。ご飯持つてきてえー」

デイレシアの切実な願いは牢獄の壁を反響し儚い余韻を残しながら消えていった。

「お願いだよえ。本当に死んじゃうよお」

鉄格子に縋り付くも何の意味もなく時間が過ぎ、ディレイアは泣きベソをかきながらその場に崩れ落ちた。

「うつ……、グスッ……。お腹空いたよぉー」

腹の虫ももう鳴き叫ぶ元気も失ったのか、その代わりに泣き出したディレイアだったがそのために牢屋に近づく人の足音に気がつかなかった。

「随分威勢がいいじゃねえか。泣いているとは思ってたが、まさか空腹で泣き出すとはな。幸せなガキだぜ」

どこかで聞いたことのある無遠慮な物言いにディレイアは驚いて面を上げた。

「よう、また会ったな。お前があそこにいるとは驚きだった。随分奇妙な縁だ」

そこで邪悪な笑みを浮かべていたのは、ディレイアがこの国に入ってから初めて知り合った男、ベルディナだった。

「べ、ベルディナ？ 何でここにいるの？ あ、ひょっとして……脱獄？」

それを聞いてベルディナは大げさに足を踏み外した。

「何で俺が捕まらにやならん。言つとくが、それでも俺は善良な人間だぜ？」

これでもと言うことは、それなりに自覚があるのだろうか。ディレイアはベルディナの物言いに溜息をついた。

「だったら、どうしてここにいるのさ。この国は罪人を見物する習慣でもあるの？」

もしもそうなら、こんな悪趣味な国には居たくないなと思いながらディレイアはベルディナの表情を伺った。

「あるかそんなもん。俺のことはさておき、お前の話がしたい」

ベルディナは側にあつた背もたれと膝掛けのない椅子を引き寄せ、疲れた表情でそれに腰をかけた。

「ボク、どうなるの？このままご飯も食べられずに死ぬの？」

「いい加減飯から頭を話せ。話し終わったら豪華な奴をこちそうしてやるから」

いい加減話を進めたいベルディナはそういつて取引をすると、ディレイアは一瞬で口を閉じた。

（現金な野郎だぜ）

この駆け引きは俺の負けかと思いつながらベルディナはこれまでの経緯を説明し始めた。

多少尋問も混じったベルディナの説明は実に簡潔で、小さなディレイアにも今の状況という物が良く理解できた。そのため、ディレイアは困惑せざるを得なかった。

「紋章を盗んだのはボクじゃないよ。あの黒服の奴だ」

再びオーケストラを奏で始めたディレイアの腹虫に嫌気がさしたベルディナが持つてきた一抱えの黒パンをものの数秒で平らげたディレイアは落ち着いていた。

まさか、腹の虫にも駆け引きで負けるとはとうなだれるベルディナだったが、それを腹いせに話に虚実を混ぜることはしなかった。

ディレイアもベルディナが嘘をついていないことを理解し、自分が何かとんでもないことに巻き込まれている予感に身を震わせた。

「俺はその話に頷ける。お前は人のものを盗むような人間じゃねえって思えるし、その動機もない。何より手に持つから例の物が<sup>ぶっ</sup>見つからなかったのもそれを裏付ける証拠だ。だが、上は黙っちゃいない。お前を何とか犯人に仕立て上げて体裁を整えるだろうよ、あの爆破事件も含めてな」

それには多分に嘘が含まれていた。この事件の全てはベルディナが担当することになった事から、その重要参考人の処遇はベルディナの一言で全てが決まるため、上も下もあり得ないのだ。

「それって、エンザイだよ。何でボクなのさ」

冤罪という言葉の意味を正しく理解しているわけではなかったが、ディレイアは多分こう使うのが正しいんだろうなと当たりをつけて

抗議した。

「ただし、お前が条件をのめば仮釈放という事にも出来なくもない」  
「それって、もしかして。その例の物つてのを探してこいってこと？」

二人が聖銀の紋章を”例の物”と呼ぶには理由があった。聖銀の紋章は王家の至宝であり、グラジオン王家がこの国を統治する証でもあるのだ。それが盗まれた事が広く知れ渡れば、国は混乱を喫するだろう。だから、例え王宮内であっても知るものが限られているそのことを口外するわけには行かず、ベルディナもディレイアに聖銀の紋章を”例の物”と呼ぶように厳命したのだった。

ディレイアの推測にベルディナはわざとらしく口笛を吹くと、  
「ご名答。話が早くて助かるぜ」

そう言つて更にこれ見よがしに指を鳴らして見せた。

「無理だよ、ボク一人でなんて。絶対無理だよお」

また泣きベソをかきそうになるディレイアを制してベルディナが口を開いた。

「誰が一人でといった？俺もだ」

「えっ？」

「この件は俺が全ての責任を負つて尻ぬぐいをする事となった。  
お前が拒否しても俺のやることには変わらない」

その表情は決意の表情だとディレイアには感じられた。さっきまでの軽い感触が全くなく、そこにあるのは多くの悲惨な現実をその目で見て、自らくぐり抜けてきた強者の眼差しだった。

大抵のことには動じず、何とか笑つて物事を乗り越えてきたディレイアであってもその眼差しを前にしては萎縮せざるを得なかった。  
「で？ お前はとうする？ 自由のために俺に手を貸すか。それともここで罰を受けるか」

「だけど、ベルディナがこの事件を解決して例の物を取り返してこれば……」

「事件は解決するな。だが、お前が聖域に踏み入った罪は消えない。



俺は俺を手伝うことでその罪を無かったことにしてやると言っているんだぜ？　これは俺が用意できる最大限の譲歩であり救いだ。お前は どうする、お前が自分で決める」

ベルディナの邪悪な笑みはまさにこの世界の悪を象徴しているかのようだった。それはまるで善意のベールを纏った悪意のようなもので、ディレイアが最も忌み嫌うものの一つだった。

「結局、ボクには残された道なんて無いんじゃないか。何が、条件だよ。何が、救いだよ。結局、あなたはボクをいのように利用したいだけなんじゃないか」

ディレイアはふさぎ込んで床にうずくまった。これならさつき恵んでもらったパンを返してしまえば良かった。このままベルディナにいいようにされるぐらいなら、このまま空腹で死んでしまった方がましに思えた。

「それは認めよう。ただし、お前にとってもけつして悪い条件ではないはずだ」

「ボクは、君がキライになったよ。君となら友達になれると思ったのに、結局君はボクを裏切るんだね」

「キライで結構。裏切りと思ってくれてもいい。だが、俺は目的のためなら全てを敵に回す覚悟がある。実際、先ほどこの国の半分以上を敵に回してきたわけだからな」

ベルディナはそういつて苦笑を浮かべると立ち上がり、そのままの足取りで入り口へと向かっていった。

「ちよつと待つてよ。何処へ行くの？」

立ち去る彼の後ろ姿を必死に鉄格子の向こう側から追うディレイアにベルディナは振り向くこともなくただ無情に言い放った。

「交渉は決裂のようだ。これ以上俺は不毛な会話を続けている暇はないんでな。後は好きにしな」

まるで後腐れ無く去っていく彼のその姿は、まるでお前などもう用済みだといわんばかりに冷え切っていた。

（ダメだ。ここで行かれたらボクは、何も出来なくなる）

ディレイアは殆ど無意識に口を開くとまるで去っていく恋人に縋り付く者のような大声で彼を引き留めた。

「その条件を飲む！！ だから、ボクをここから出して！！」

カツンとかかとをならして立ち止まったベルディナは、クルツとターンをしてニヤツという悪魔のような笑みをディレイアに向けた。（しまった。あれも演技だったんだ）

と後悔するディレイアだったが既に時が遅すぎた。

「この駆け引きばかりは俺の勝ちのようだな」

ようやく意趣返しが出来たといわんばかりに笑うベルディナを見て、ディレイアはまるで魂の抜けた人形のように牢獄の床に崩れ落ちた。

ようやく牢獄から出して貰えた頃には既に王国には夜の帳が下ろされていた。

「ここの夜は冷えるんだね」

ベルディナとは少し離れて後ろを歩くディレイアは、冷え切る夜の風に身を擦り合わせた。

「今年はどういうわけかな。例年ならそろそろ熱帯夜が続きそうなもんだが」

夏の初めにしては厚着をしているベルディナは、寒そうに身体を震わせるディレイアにきていたコートを羽織らせた。

「あ、ありがとう」

キラリといつてしまった手前どう反応していいのか困ったディレイアは少し顔をうつむけ気味にして小さな声でそう呟いた。

「風邪を引かれると俺が迷惑するだけだ。明日、厚手のコートを買いに行く方が良いな」

ベルディナの素っ気ない物言いの裏に、幾何かの照れを見つけたディレイアは少し微笑んでベルディナの背後に駆け寄った。

「そうだね。だけど、ボク、お金持ってないよ？」

ディレイアはそういいながらベルディナのすぐ後ろを歩き、ベル

ディナはそんなディレイアの変わりに身少しぎよつとするが、すぐに視線をただした。

「金の心配なんてすんな。今回は調査費で国から金をぶんどってる。多少の豪遊程度は目をつむってくれるだろうさ」

それって、横領っていわないのかなとディレイアは思うが口に出さないことにした。

「ひよつとして盗んだの？」

とディレイアが言った言葉にベルディナはいきなり立ち止まった。「わっ！」

その後ろを歩いていたディレイアは当然ながらベルディナの背中にぶつかるが、軽いディレイアの衝突を受けてもベルディナは少しもよるけなかった。

「えーつと？」

黙り込んでしまったベルディナの肩は少し震えているように見えた。

（ひよつとして怒ったのかな？）

と、心配し、ディレイアはゆっくりと彼の脇からその表情を読み取ろうと身体を動かした。

その瞬間、ベルディナはディレイアの頭をワシツとつかみ取ると、グリグリと乱暴にかきむしり始めた。

「わっわっ！　ちよつと、ベルディナ。止めてよ」

次第に荒々しくなるその手つきにディレイアは無駄な抵抗を始めるが、その次の瞬間に聞こえたベルディナの大笑いに抵抗を止めた。「だーはっはっはっは……。おい、ディレイア、お前も面白えこというじゃねえか。いいなそれ、国から調査費用を盗んで来たってかそれいだきだ。そういうことにしておこう」

そうやって笑うベルディナを見て、ディレイアはやつとの事でその束縛から抜け出すと、なんだか自分もおかしくなつてついつい笑い声を上げてしまった。

（ベルディナはキライだけど、好きになれそうかも知れない）

夜空に浮かぶ一番星を頭上に眺め、ディレイアはそれまでの全てが変わってしまいつつあることを感じた。だが、それも悪い変化ではないと感じると、この目の前にいる得体の知れない魔術師をもう少し信じてみてもいいかなと思いはじめていた。

## 第七話 不可視のひずみ

王宮の朝はそれほど悪いものではなかった。

その後、ベルディナの誘いで食事をとったディレイアは王宮の食事といってもやはり味の濃い料理ばかりだということに愕然としつつも、その中でも繊細な奥ゆかしさを感じ少しこの国の料理を見直した。

夜も遅く、汗と酒の匂い（リュックに染みついた蒸留酒の匂いだ）でかなりの悪臭を漂わせるディレイアを湯殿に引っ張っていったベルディナは、出たら中庭に來いといって去っていった。

湯殿は広くて綺麗で、何よりも豪華だった。元來風呂にはいることがキライではないディレイアもついはいはしゃいで長湯をしてしまい、寒空の下で待つベルディナに随分と叱られた。

「女じゃねえんだ。風呂つてのは手早く済ませるようにしろ！」

多分に誤解を含む言い方だったが、ディレイは無言で肯き、用意されていた寝間着のまま部屋へと案内され見たこともないようなふかふかなベッドにだいぶすると同時に気絶するかのような勢いで夢の世界へと旅だった。

柔らかな雲に抱かれている感触の夢を堪能するあまりディレイアは寢坊をしてしまった。

とりあえず、朝食をもらおうと昨晚案内された食堂に足を運んだディレイアだったが、その姿のせいで食堂に居た人間全員の注目を浴びてしまった彼女にとっては、その脇で手を振るベルディナが思わず救いの神に見えてしまったのしかたのないことといえる。

「よく寝られたか？」

朝食に相応しい簡素な料理を頬張りながらベルディナはディレイアの表情を覗き込んだ。

「寢坊するくらいよく眠れたよ。あんなベッドは初めて」

ふかふかの毛布どころか豪華な天蓋さえも設えられたそのベッド

はまるで王族の姫君が使うものとも感じられた。

「一応あそこは客室なんだが、国賓の従者を泊めるためのもんだから少し質素なんだよ。まあ、気に入って貰えてなによりだ」

あれで質素何だったら街の宿屋の部屋なんて犬小屋にもならないじゃないかと思いつつ、ディレイアはここに住む人たちにとっては犬小屋の方がましだというんだろなと気がつき、少し暗い気分になった。

「何だ？ 国賓の部屋で眠りたかったか？ それはさすがの俺でも無理だぞ」

ベルディナはそういいながらちぎったパンをスープに浸してそれを口に運んだ。

「んー、ちよつとね。王宮と下町にどれだけ差があるのかって考えてたところ」

ベルディナの真似をしたということではないが、ディレイアもパンをちぎってそれをスープに浸して食べた。

とてもおいしい。

何よりも朝食ということで味付けを薄い目にしてあるのが、今までなじみの深い感じに思えてディレイアは目を細めた。ただ、何日かこの国の料理を口にしていいると、何というか、少しだけ物足りないような気もしてくるのが不思議なものだ。

「王宮と下町の差か。それこそ、天と地ほどの去って奴だな。まあ、あんまり深く考えない方が良いぜ。精神衛生上良くない」

卵とじにされたハムの焼き物を口に運びながらベルディナは朝であることにかかわらず傍らに置いてあったワインをグラスにつぐとグイッとそれを飲み干してしまった。

この国には朝の飲酒が奨励されているのだろうか。よく確かめてみると、それはベルディナだけではなく他の者達も思い思いに食事に興じつつ、ワインを片手に談笑をしているようだった。

「そんなに飲んでいいの？」

既に三杯目に入りつつあるベルディナを止めるようにディレイア

はそう話しかけると、ベルディナは「お前は何を言っているんだ」といわんばかりにきょとんとした眼差しを浮かべた。

「ワインは一日の原動力だろう？　これが無くてどうやって今日を生きていける？」

それは世間の常識なのかも知れない。基本的に朝食をこいう場所ですらない（正確には取れるだけの金がない）ディレイアは未成年であることも関わり、朝から酒を飲む習慣に出会ったことがなかったのだ。

いや、それは王宮だからその習慣なのかも知れない。ディレイアはそう思い直し、今度街に出た時、朝食堂にいつてみようと思いを固め、今は判断を保留にすることとした。

朝食も食べ終わり、そろそろ人もまばらになってきたところでベルディナは食後の珈琲を飲みながら、

「さてと、この後のことだが」といって話を始めた。

結局彼はその後、ワインを一ボトル全て空にしてしまい心配するディレイアをよそに至極平然とした様子だった。

（最初に会った時もそうだったけど、この人はとんでもなくお酒に強いんだな）

とディレイアは思いつつ彼の話に耳を傾けた。

「いろいろ物要りだ。これから城下町に出て買い物をする。お前の荷物を見せてもらったが……」

そこでベルディナは言葉を切り、怪訝そうな目でディレイアを見た。

食後の牛乳で咽を潤わしていたディレイアはそんな彼の目に小首をかしげた。

「お前、あんなゴミを持って旅をしていたのか？」

その言い方に、ディレイアは飲んでいた牛乳を吹き出しそうになった。

「ち、違うよ！ あれは、落ちた時にあんなったの」

それを思い出してディレイアはふさぎ込みそうになった。事故とはいえ、お気に入りもあった荷物の殆どが使い物にならなくなってしまったのだ。これから買いそろえなければならぬと思うと少し陰鬱な気分になってしまう。

「まあ、だろうな。ほれ」

なに冗談を真に受けているんだとベルディナは思いつつ、その足下に隠しておいたものを机の上に置きディレイアの前に差し出した。「えっと、これは？」

さつきから随分と足下が邪魔だと思っていたそれらは、ベルディナが用意したものだった。

何か細長い棒のようなものと、真新しいリュックサック。中にはまだ使われていない道具が良く整理されて収められており、それを見る限りどうやらついこの間までディレイアが使っていた物と殆ど変わらないものが入られているようだった。

「それがお前の荷物で、こっちが新しい剣だ。前のがらくたとは違ってミスリルのしつかりとした奴にしておいた」

細長い棒に見えたそれは、よく見るとしつかりとした柄と見事な鍔、そして簡素ながら品のいい装飾が施された剣だった。鞘を抜かなくても分かる。これは、ディレイアが今まで持ってきた剣など単なるがらくたに見えてるほど洗練された剣だ。

「あの……」

ディレイアは言葉を無くした。

「他に必要なもんは後で買いに行く。特に着るもんは自分で選べよ。ガキの服なんて、ここではそろえられないからな」

そんなディレイアにかまわず、ベルディナは珈琲をすすりながら話を続ける。

「あ、あの！」

それを遮るようで気が引けたが、ディレイアはどうしてもいわなくてはならないことがあった。



「あん？」

話の腰を折られたベルディナは少し不機嫌そうな表情でディレイアを睨むが、ディレイアはそれにかまわず頭を下げた。

「あ、ありがとう。ベルディナ。とっても嬉しいよ」

ベルディナは、なんだそんなことかと視線を外すと、

「ああ、感謝しな」

と素っ気なく言って席を立った。

「行くぞ、準備しな」

椅子の背もたれにかけてあった灰色のローブを身に纏うい、ベルディナはディレイアを待たずに食堂を出ようとした。

「ま、まって」

ディレイアは慌ててリュックを背負うと、新しい剣を腰に結わえ、急いでベルディナを追いかけた。

朝は少し風が冷たかったが、それでもさんさんと照りつける太陽に次第に暖められていく空気に、やはり初夏の陽気を感じさせられた。

ディレイアはこれからの自分の未来に少しでも希望を見いだすと思いを切らせてかけだしていった。

城下の町並みは、王国で起こった大事件のことなど何処に吹く風というほどに平穏を保っていた。

「情報封鎖は完璧に機能しているようだな」

とうそぶくベルディナをおいながらディレイアは初めてじっくりと見る町並みに目を奪われていた。

確かに、この町はスリンピア王国の王都と比べれば幾何か質素な町並みの様相を示している。だが、そこに住まう人々を見ると確かにここが世界に名だたる国家であると納得させられることも多くあった。

何より人が生き生きしている。スリンピア王国は人が多い分、どこか町並みによそよそしさが漂う感じがしていた。しかし、朝霧が

晴れると共に徐々にその姿を示す町並みはどこか雄壮としていた。

そして、朝も早くから街の至る所に建てられた工房の煙突からは既に煙が立ち上っており、炭が焼ける匂いが徐々にその濃度を上げていつている。

良質のミスリルをハンマーで打ち付ける軽快な音は、まるで町並みを旅する吟遊詩人の琴の音のように家々と溶け込み膨らんでいくようだ。

ディレイアは、腰にぶら下がるミスリルの剣をそつと握りしめた。ベルディナはそんなディレイアを振り向くことなくどんどん先へと進んでいく。ディレイアはそんな彼において行かれないように歩調を強めるが、ついつい目が向いてしまう工房の様子にその足も遅れ気味のようだった。

そのため、ベルディナが一つの店の前で立ち止まっても今度はその背中にダイブすることはなかった。

「ここ？」

ディレイアは店を開けてまだ間もないその店を見上げた。

「ああ、ここなら大概のものは揃う」

クランツの雑貨やと記されたその看板の隅には比較的大きな文字で『王宮御用達』とかがれてあった。

確かにこれなら信頼できそうだった。その店が王国の建国とほぼ同数の歴史を持つことにも驚いたが、何よりも驚いたのはその店構えが全く気取ったものではなく、例えば庶民でも足を運びやすいよう門戸が開かれている点だった。

「良さそうな店だね」

ディレイアのそのつぶやきに、ベルディナは「当たり前だ」と答え、さつさと入り口をくぐっていつてしまった。

ディレイアもそれに続き特に抵抗感もなくその入り口に足を運んだ。

しかし、足を運びやすいのはどうやら門構えだけのようだった。店の中の品物をいろいろ見て回ったディレイアはそこにかかれた

値札を見て、次第に居心地が悪くなつていった。

「何でただの食器が五ソートもするんだよ……」

様々に並べられた食器類の棚の中でも最も安いものを見繕つてもその値札にかかれた金額には溜息しか思いつかなかつた。

今更鉦山の日当の金額を思い出してみても、この食器を買つたためにその収入の半分以上を払わなければならないとは何か間違つていると彼女には思えてしかたがない。

王宮御用達も伊達ではないということか。例え、金は全て王国から出されるといわれても日頃から身についた貧乏性がそれをはね除けてしかたがない。

「さつさと決めちまえよ。時間がねえっていつてんだらう?」

そんなディレイアに業を煮やしたのか、ベルディナはその頭をこついだ。

「だつて、みんな高いんだもの」

身を縮めて棚を見上げるディレイアはいつもより小さく見えた。

「まったくお前は。こんなもん、適当に選らんじまえばいいんだよほれ、ナイフとフォークはこれでいいだろう」

ベルディナは棚の中から適当にそれらをつかみ取るとともに値札も確かめずにそれを籠に放り込んだ。

「ご、五十ソート? 駄目駄目! こんな怖くてつかえない」

壊れるものでもないくせにディレイアはそれをおそろおそろ籠からつまみ上げると元あつた場所に丁寧に戻し、一息ついた。

「なるほど、むしろ持つてると安心出来ねえってことか」

ベルディナはようやく合点がいったといわんばかりに腕を組んで大げさに首を縦に振った。

「このお店高いよ。何でお皿だけで一ソートもするの? 破産しちゃう」

破産という言葉にあまりにも実感がこもっており、既にディレイアのまぶたには僅かに涙が見え始めていた。

(こいつ、よく泣くな。涙腺弱すぎだつての。まあ、ガキじゃしか

たねえな)

ベルディナは少し哀れに思いつつも店の中を見回して溜息をついた。

「俺にとつては安もんしか置いてねえように見えるがな」

普段大きな金を動かしていることと、彼が王宮からもらっている給金が多すぎるせいか、それともそもそも彼には金銭感覚というものが欠如しているのだろうか。ベルディナはどう考えても高い買い物をしているようには思えなかった。

「それは、ベルディナが普段贅沢してるからだよ」

憎々しげに見つめるディレイアの視線を受け流しつつ、ベルディナはひとまず考えを変えることとした。

「それは言えてるな。だったら店を変えるか。親方から聞いた店なら何とかなるだろう」

彼の知る数少ない庶民の感覚なら、ディレイの納得できるものも手にはいるかも知れない。

「そうして！」

まるで藁をも掴む溺れ人のような表情で懇願するディレイアはベルディナの袖を引っ張って外へ出ようと誘った。

「その前に……、おい、店長。この宝石を一〇個づつくれ」

ベルディナはそんなディレイアをとりあえず制しながら、その側に置かれた眩い光を放つ棚から幾つかのものをつかみ取ると、店長を呼び出した。

ディレイアはその手の中にあるものをみて卒倒しそうな感覚に襲われた。彼の手の上には、ガーネット、トパーズ、エメラルドといった三種類の宝石が置かれている。

ディレイアはその一つ一つの値段を確認し、口から魂が抜ける感覚を経験することとなる。

「それ、一つ二〇〇ソートもするよ？」

三種類が十個ずつ、一つが二〇〇ソート、つまり合計で六〇〇〇ソート。計算に疎いディレイアでもそればかりは一瞬で頭の中を駆

けめぐった。

「安いだろう？」

ニヤツと笑うベルディナに、ディレイアは言い返す気力さえも奪われ、ただ人形のようにカクカクと頭を振るわせた。

「……ウン、ソウダネ……」

ディレイアは今、あの世とこの世を分ける溪谷の吊り橋を眺めていた。

実際の支払いは金貨を払うのではなく、請求書を王宮へと送る書面にサインをするだけのものだった。後から考えると、彼がこの店を選んだのも『王宮御用達』であるからなのだとディレイアは気がついた。

それから安い店屋を探してその品物に納得したディレイアだったが、ベルディナは、

「細かい持ち合わせがねえんだ、とってくるからちよつと待つてな」といって、店にディレイアー一人を残して元来た道を引き返していった。おそらく、王宮にある金庫か、銀行に行ったのだろうとディレイアは想像した。

そうなると少し時間がかかると思い、雑貨屋の隣にある服屋で先に着る物を買っておこうと思い店を後にした。

ひとまず、昨晚ベルディナがいていた厚手のコートと、よれよれになった上着に丈夫で長持ちするズボンを二着。そして、なるべく風通しがよく、大事な部分を変に擦り付けない上下の下着。一応何かのために作業用の軍手を一セットと、靴下を三足ほどそろえたが、全部会わせてもディレイアの手持ちだけで買えそうだった。

（お金は後でベルディナからもらえばいいや）

と考えながら、カウンターでにこやかな笑みを浮かべる女の店員にそれらを全て渡した。

「お買い物？ 偉いね」

どうやら、この国の人間はみんなディレイアを子供扱いしなければ

ば気が済まない様子だった。ディレイアは少し不機嫌になりつつも、坊やとか小僧とか言われただけでしたと思いながら会計を待った。「あれ？　これは、女の子用よ？　ボク？」

店員の手が、一番下に重ねてあった下着類に伸びた時、ディレイアはやっぱりかと思いい仕方なく事情を話すこととした。

「大丈夫ですからそれも勘定に入れておいてください。ボクは一応女の子です」

ディレイアはこれと言うのが嫌だった。これと言うと、『こんな小さな女の子が旅を？』という眼差しをもらうからだ。特に、仕事幹旋所の職員にこれを知られてはならない。もしも知られてはおそらく、どんな仕事でも回してもらえなくなるかも知れないからだ。（男だとか女だとか。ボクはボクなのにどうしてこんなに扱いが違うんだろっ？）

この世の不条理に嫌気が差し始めたディレイアは店員の不躰な視線を受け流しつつ、無言で金を払って外に出た。

どうやらベルディナはまだ来ていないようだった。

ディレイアは少しホッとして、買ったものを乱雑にリュックに詰め込むと本来の目的である雑貨屋に足を運んだ。

ようやく全てのものを買いそろえた頃には、ボルドーミサの先兵も守蛇の門の彼方に沈もうとする太陽の朱にすっかりと身染めていた。

「何でこんなに時間がかかった」

ベルディナの奢りでディレイアが泊まっていた宿屋の食堂で夕食をとった後、ベルディナはそう嘆きながら王宮へと引き返していく。ディレイアは今晚はその宿屋で泊まってもよかったが、ベルディナは金の無駄だと言ってそれを却下した。ディレイアは、ベルディナも少しは庶民の金銭感覚を学んだのかと安堵した。

その店で鉱山で別れたロベルトが顔を見せていたのは嬉しい誤算でもあった。ロベルトは居なくなってしまったディレイアを心配し

てずっと食事が咽を通らなかつたらしいが、元気な顔を見せるデイレシアを見て無愛想ながらも喜び、その側に座るベルディナを見て萎縮していた。

しかし、ベルディナの人当たりの良さを見て徐々にその緊張を解きほぐしていき、最後には笑顔で彼と談笑をしていた。

さすがにどうしてデイレシアとベルディナが一緒にいるのかを知らせるわけにはいかなかったので、実は知り合いだったんだということでお茶を濁した。

実際、ベルディナとデイレシアはそれまでも知り合いだったのだが、デイレシアがベルディナの正体を知ったのはそれよりもかなり後のことであるから、少しデイレシアは罪悪感を覚えた。

「気にするな。あれでよかったんだ」

と言うベルディナの言葉にもつともだとは思うが、どうしても胸に引っかかりを覚えてしかたがない。

まるで、ばれていない悪戯を隠す子供のように、その違和感はベッドに横になって寝付くまで続くこととなった。

デイレシアは徐々に白んでいく意識の中、どうして自分がここにいるのか分からなくなり、そつと母の名を呟いた。

「今日は、お母さんの夢が見たいな」

まるで幼子のように呟く彼女の願いは聞き届けられることはなかった。

## 第七話 不可視のひずみ（後書き）

一応補足までに、本編では世界観を崩す恐れがあり記載できなかったのですが、この世界の通貨であるソートは、一ソートだいたい一〇〇〇円ぐらいとお考えください。

つまり、ディレイアの日当がおおよそ一〇ソートで一〇〇〇〇円ぐらい（結構割のいい仕事ですね）。

それに対して、ベルディナが大人買いした宝石類は、六〇〇〇ソートつまり六〇〇万円（！！！！）。ベルディナの金銭感覚の欠落ぶりがよく分かりますね。だいたいこの値段、ベルディナにとっては何でもない金額らしいです。

ちなみに、ソートの下にはソイトという単位があり、一ソートはおおよそ一〇〇〇ソイトというレートになっています。



## 第八章 ふるさとの詩

### 第八章 ふるさとの詩

朝、寝ぼけ眼のデイレイアにベルディナはただ一言、北に向かうぞ、と言って食堂を後にした。

デイレイアは慌ててパンだけをもらい、ベルディナを後にした。まともに朝食を口にせず、食堂を出たデイレイアにベルディナは、飯はちゃんと食っておけと言うと、制止するデイレイアの声を半ば無視して足早に自室へと向かっていった。

ベルディナの部屋は朝だというのに薄暗かった。

「光に弱いものを置いてあるからな」

というベルディナは机の横の作業台に置かれた宝石を手に取り、ノギスや罫書き棒、ヤスリなどを使ってそれに何らかの加工を始めた。

柔らかい布をかましてバイスで固定された宝石を覗き込むと、それはどうやら昨日店で彼が大人買いした宝石の一部のようだ。

どうやら、昨日の晩からずっとその作業をしていたらしく作業台の周りには宝石やミスリルの削り屑が散乱して、とても落ち着きのない様相を示していた。

魔導結晶の加工をしているのかと思ったデイレイアだったが、そのできあがりが置かれたスペースにあるのは一般的なものに比べて幾分か小振りのものばかりだった。

しかも、それは鋭利にときすまされ、不用意に触れたデイレイアの指を何の抵抗もなく切り裂いた。

「あっ！」

と気づいた頃には作業台に大粒の鮮血がしたり落ち、敷かされていた布に大きな血痕を作ってしまったていた。

「お前、なにやってんだ」

といってあきれ顔でベルディナは彼女に包帯を投げ寄越すと再び作業に戻った。

ディレイアは邪魔をしてはいけないと思い、彼の目の届かないところで手早く傷を手当てすると、ひとまず朝食を済ませてこようとして部屋を去った。

朝食が終わり、暫くボンヤリとしていたところにベルディナが顔を出した。中庭は静けさに包まれており、普段は人の行き来が激しいはずの王宮の廊下もどこか閑散としていた。

ディレイアにしてみればいつまでも怪訝な目つきで自分を見る人間が少ないことには助かっていたが、どこか張り合いのない感覚もあった。

「まあ、今日は休日だからな。城下もこんなもんだ」

と、少し目の下に隈を作りながらベルディナはよっこらせと言つてディレイアの正面に腰を下ろした。

途中アグリゲットと名乗るベルディナの同僚らしい魔術師が顔を見せたが、その彼もベルディナと二言三言話すだけですぐにどこかへ行ってしまい、ディレイアの事は目にも入っていない様子だった。ディレイアにはその話の内容を少しも理解できなかったが、どうやらベルディナが司っているラボの引き継ぎに関することだったらしい。

彼の持つ書類をさして、いろいろな事を口にするベルディナの表情は普段の軽さは全くなく、かといって牢獄で見たあの冷たい表情とも違っていた。

ああ、これが王宮でのベルディナなんだとディレイアは妙に納得して、暫くそんな二人を遠くの風景を見るようにじっと観察していた。

「悪いな、あいつも忙しいんで、少し礼にかくところがあつたかも知れん」

まさかベルディナの口からそんな言葉が出るとは思っても見なか

ったディレイアは、

「別に気にしていないよ。変な目で見られるよりましだもん」

と、少し素っ気なく答えるとベルディナから目をそらして中庭を見回した。

「あまりゆっくりはしてらんねえ」

そう呟くベルディナにもう一度視線を戻すと、ディレイアは無言でその続きを促した。

「部屋から荷物を取ってきた。すぐに出発する」

見るとベルディナの準備は既に整っているようで、彼は背中に小振りの弓と腰に矢筒を差して、その側にはディレイアの持つものより二回り以上も大きなリュックサックが置かれていた。

「うん、分かった」

いよいよここから始まる。ディレイアはそう決意し、少しゆっくりとした足取りであてがわれた部屋を目指し中庭を去った。

「対応が遅れている。これが後に響かなけりやいいんだがな」

ベルディナの淡い期待は脆く崩れ去ることとなった。

誰にも見送られることもなく、誰からの賛辞も、出立の儀礼も交わすこともなく、二人はただ無言で王都を後にした。

近くを通りかかった寄り合い馬車に便乗し、彼は北へと向かった。

「黒服の男が北のクローナ村に向かったというらしい」

ベルディナは簡潔にそう説明すると、馬車の縁に背中を預け、一人ただ黙々と読書に興じていた。

それが何の本なのかうかがい知ることとは出来なかった。ただ、その表題に記載された「魔導結晶に関する……」という記載からはその本が専門書か何かだと推測できたが、魔導結晶に関する何の本なのかはその文字が難しすぎてディレイアには読めなかった。

ディレイアは自分以外にベルディナしか居ない馬車の中を一望し、まだ鞘から抜いたことの無かった剣を確かめるため、側に置いておいた剣を引き寄せた。

一応剣の手入れのしかたは知っていたし、荷物には砥石やさび止めのオイルも入れられていたが、幌の隙間から差し込む光を反射するその剣身には曇りの一つも見受けられなかった。

ディレイアは改めてこの剣の完成度に心を奪われた。丹念に磨かれたミスリルはまるで鏡面のように覗き込むディレイアの表情をはつきりと映し込んでいた。

これを見せられてはそれまでに持っていたあの剣ががらくたにも属しないものだと言われても納得がいくことだった。結局あの剣は破棄されることなくディレイアの元に戻ってきた。しかし、予想通りその剣は鞘を割らないと抜くことが出来なかったらしく、その鞘は真ん中から綺麗に割られた状態でそこにあった。

王宮のものに頼んで、ハンマーとやつとを借りて形ばかりに曲がりを修正してみたがダメだった。中庭で試しに振ってみても真っ直ぐ振れなかったのだ。

そんな彼女を見ていた一人の少年が、煮えを切らして彼女から剣を奪いそれを振ったがその少年は全くダメだといわんばかりに首を振るだけだった。それでもディレイアよりもずっと綺麗に振れていた事から、同年代でありながらその少年は剣術に長けていると実感した。

「すごいね」

と笑顔を向けるディレイアに、レイリアと名乗ったその少年は照れくさそうにうつむき、まるで投げ返すように剣をディレイアに渡すと、

「これを振ってみて」

と言って自分の腰に差しあつた剣を鞘ごとディレイアに手渡した。その剣は、今ディレイアが持っている剣と同じ物だったような気がする。

試しに振ってみたが、何故かとても腕にしっくりと来てまるでその剣がずつと自分の側にあつたかのような感触さえ感じた。

しかし少年は、

「全然ダメだ」

といって、ディレイアの背後から彼女の腕を握って正しい振り方、足さばき、重心の移動などかなり懇切丁寧に指導してくれた。

（兄弟が居ればこんな感じなのかな）

とディレイアは思いながら、暫く楽しい時間をレイリアと共に過ごした。

日が暮れる頃、レイリアは仕事があるといって中庭を後にし、それ以降出会っていない。後からベルディナに聞いたことだったがレイリアはこの国の王子様だったらしい。

確かにその洗練された物腰といい、少し無愛想な口調の中にもどこか隠された高貴さがにじみ出る様は確かに王族とはかくあるべきと言わんばかりの物だった。

「もう一度会いたいな」

ディレイアはそう思いながら、手に持つ剣をひたすらに眺め、その握りや剣の重心の位置を確かめるように何度も握り直しては構え直した。

時々脇目でちらつとそれを見ていたベルディナも、別段他に迷惑をかけていないそれを咎めることもなく本を読み続けた。

日もてっぺんに登る頃、ディレイアが空腹で非常食に手を伸ばしそうになるのを遮るベルディナに、馭者が幌から顔を覗かせ、クローナ村への到着を告げた。

クローナ村はディレイアにとって馴染みの深い雰囲気个村だった。村人の歓待を受けながら、村をあちこち回ってみたディレイアがその理由を理解したのは、この村が以前母と住んでいた家の側にあつた村に雰囲気がつくりだたと気がついた時だった。

だからなのだろうか、馴染みの深いはずのこの村がどこか遠くにあるような感覚に襲われたのは。

二年前、母が死んだあの日から数日後、彼女はこの村を一度捨てた。逃げたと言ってもいい。

デイレシアの心の隙間に少し冷たい風が吹き抜けていった。

「ここの料理、王都の奴より随分ましだな」

二人が部屋を取った宿屋から歩いて少しにあるところに建てられた食堂は、今日も仕事終わりの者達であふれかえり、談笑が渦となつて喧噪を形作っていた。

「何で、こんなに賑やかなのかな。今日はお休みじゃなかった？」

王都を出る前に聞かされた今日は休日であることをデイレシアは忘れていなかった。馬車の中もあれだけ閑散として他のもそれが理由だと思っていたからだ。

「王都は結構余裕のある奴らが多いからな。地方に行けばこんなもんだ」

そういうと、ベルディナはウイスキーをグイツとあおった。グラジオン王国では一般的な酒類とされているその蒸留酒はお世辞にも上物とは言えない物だったが、庶民にとってはかけがえのない友であることは間違いない。

事実、カウンターに座る者達を筆頭にどこか彼処かで同じものが飲まれている。

この国で取れる麦はどれも主食にするには向かない物だと言うらしい、その僅かは黒パンや堅パンに加工され、残りは蒸留所に運ばれウイスキーになると言うらしい。

実際、この国には世界的に有名なドーフェスやマークイスといった蒸留所が領地に建てられているらしいが、そんな銘柄を教えられてもデイレシアにとっては話の種にもならないことだった。

「申し訳ありません、お客様。こちら、二名様と相席でもよろしいですか？」

あまり会話の弾まない二人の間に給仕が割り込み、本当に申し訳なさそうな顔で訪ねてきた。

店いっぱい埋め尽くす人の量を見ると、なるほど、これでは相席をせざるを得ないと悟ったデイレシアは、一度だけベルディナの表情を盗み見ると、

「大丈夫です。どうぞ」

と言つて席を明け渡すようにベルディナの正面から、その隣に席を移った。

給仕は手早く料理をそちらに寄せると、入り口で待つ二人の男女を空いた席へと誘った。

「相席に感謝する」

比較的ラフで動きやすそうな服装の男は、それに似つかわしくない口調でそういうと席に着いた。

「人がいっぱいじゃあ。もっと席を増やせばいいのに」

まともに礼も言わずに席を陣取った女性は、白い上着と長いスカートをはいたひいき目で見なくても綺麗な女性だった。

ベルディナはウイスキーを傾けながら、二人の方をちらっと見ると、

「お似合いの夫婦だな。見てて腹が立つぜ」と言い放った。

「君、初対面の手合いに対して少し無礼ではないか？」

男は眉をひそめると、ベルディナのその物言いを咎める。

「そうよ、あんた何様のつもり。それに、あたしとこの人はそんなんじゃないわ」

女の方も黙つてられないと言わんばかりに口調を荒げた。

「初対面か」

ベルディナは相も変わらずその口調で二人に問いかけた。

二人はお互いに、そうだと告げると近寄ってきた給仕に注文を告げた。

ディレイアは少し慌てながら二人とベルディナを交互に見やった。

「あ、あの。済みません、どうか許してやってください。この人ちよつと酔つていて」

「そういうことだ、不躰で悪かったな。少し虫の居所が悪かったんだ。許してくれるとありがたい」

ベルディナはグラスを置くと、少しだけ頭を下げて詫びた。

「謝ってくれたんならいいわ。許しましょう?」

女はまだ不機嫌そうだったが、運ばれてきた料理に目を輝かせ早速それらを頼張り始めた。

「私の方も少し礼を欠いていた部分もある。お互い様と言うことで水に流そう」

男はベルディナが差し出したウイスキーに少し気分をよくした様子でそれを口に含んで一息ついた。

「ところであんた等、名前は? 旅業医師と、バイオリニストなんだろう? 仕事は順調かい?」

そう聞くベルディナに二人は少し驚かされた。

「何故、私の職業を?」

「どこかであつたかしら?」

女は食べる手を止めてベルディナの目を覗き込んだ。

「おそらく初対面だ。男のあんたの方は王都の酒場で目にしたことか会ったかも知れんが。理由は単純、彼女からは消毒液の匂いがしてたし、その格好と胸のバッジを見れば一目瞭然。男のあんたからは松脂の香りがするな。その格好から無骨な職業に就いている感じはしねえから剣の手入れ用の松脂じゃねえだろう。だったら、バイオリンをやつてると考えるのが一番自然だ」

すらすらと紡がれていくベルディナの推理にディレイアは感心してしまった。それは目の前の二人も同じだった様子で、暫くポカんとベルディナを見ていた。

「いやはや、私はあなたを少し甘く見ていたようだ」

男はそういつて姿勢を正すと、今までの非礼をわびた。

「私は、ミリオン。理由あつて中名と家名を伝えるわけにはいいが、流しの演奏家をしている」

ミリオンはそういうと、ベルディナに片手を差し出した。ベルディナはそれを握り、続いてディレイアにも差し出され彼女もそれを握りしめた。

続いて女の方に目を向けると、女は少し引きつったかのような笑



みを浮かべ、

「あたしはユア・タリス・キルリアル。あんたの言うとおり、旅業医師よ。ヨロシク」

ミリオンに習ってベルディナに手を差し出すユアはそれに振れた瞬間少し身体を震わせたが、ベルディナは意を介する事もなく少し長めに握手を交わした。

続いてディレイアにも握手を求めたが、今度はユアの方が必要以上になくディレイアと握手を交わすこととなった。

「名前を聞いておきながら俺の方が名乗らないのは失礼だな。俺は、ベルディナ・アーク・ブルーネス。こんななりでも一応王都の魔術師をやっている。まあ、よろしく」

ベルディナ大導師の名を聞き、二人は暫く惚けたような表情をしていたが、それがベルディナ自身の事だと言うことに気がつく、さすがに二人も驚愕して息をのんだ。

ベルディナは少し楽しそうに唇を持ち上げると、テーブルの下でディレイアの膝を叩いて、次はお前だ、と誘った。

「あ、えっと。ボクはディレイア。よろしく」

ミリオンはそれに「ああ。こちらこそ」と言って軽く頭を垂れ、ユアは、

「ディレイアちゃんね。よろしく。かわいい坊や。ね、どこから来たの？」

と、今にも頭を撫でてきそうなユアを警戒してディレイアは少し後ずさった。

「ぼ、ボクは坊やじゃないよ。ディレイアだ。それにボクはベルディナと一緒に居るんだから、それぐらい分かるでしょう！」

あたふたとするディレイアを見て、なおも「かわいい」と評するユアにベルディナは呆れて肩をすくめた。

ミリオンもそんな彼女の変わりように少し驚くが、（おそらく、子供好きなのだろう）

と考え、ようやく運ばれてきた料理に口をつけた。

暫く四人はそれぞれに談笑し合い、ベルディナはその合間に黒い服の男についての情報を巧みにつり上げようとしていた。

ミリオンとユアはそれについてはあまりよく分からない様子だったが、噂程度にそれがこの村で見かけられ、そしてそれは真っ直ぐクローナの大森林に向かつていったということだけ口にした。

（どうやら、道は正しかったようだね）

と視線でディレイアに伝えると、ディレイアも、

（そうだね）

と軽く頷いて見せた。

「ところで、楽師の旦那。せっかくだから一曲やってくれよ。いい加減ここの喧噪にも飽きてきたところだ」

黒い服の男について少し興味を引かれた二人から話の逸らすには上手いやり方で、ベルディナはミリオンに水を振った。

「ん、そうしたいのは山々だが。宿にヴァイオリンをおいてきてしまった。残念だが、今夜は無理のようだ」

そういえば、ミリオンはなにも持ってきていなかったなとディレイアは彼の様子を見て、

「それなら仕方ないね。残念だけど」

といって話を終わらせようとしたが、ベルディナは食堂の脇を指さし、そこにあったピアノに注意を向けた。

「あれだったらいけるだろう？ まさか、流しの楽師様がピアノが弾けないなんて、そんな事無いよな？」

ベルディナの話術はさすがとしか言いようがない。適度に相手のプライドを揺さぶるその言い様は、ミリオンでなくても期待にこたえなくなってしまうほどだった。

それは、ミリオンが無理だと言っても、簡単な曲程度なら何とか弾けるディレイアは彼の代わりに弾くよと言ってしまいそうになるほどだった。

「といってもディレイアが弾ける曲など、幼子が最初に習う『ウオーキング キャット マーチ』という聞けば失笑を買うものに過ぎ

ないが。

結果的にディレイアは恥をかかずに済んだ。

ミリオンは少しだけ考えて、食堂の店長に目を向けた。

「いいだろう」

店長はミリオンに軽く頷くと、彼はゆっくりと立ち上がって隅の鍵盤へと足を進めた。

流しの演奏家が曲をやるという言葉が店中を伝わり、にわかに騒ぎ立てていた者達はみな口を噤んで彼の一手拳動を見守った。

ミリオンは鍵盤を開き、端から一つずつ鍵盤を叩いてその音の調子確かめていった。

「少しチューニングが甘い、問題はないな」

というと、側の本棚から楽譜の束を取り出しそれらをぱらぱらとめくっていった。その多くはどうやらグラジオン王国の民謡をアレンジした物らしく、作曲者の名前からするとどれもこの国の人間のようにうしかった。

この国の民謡をよく知らないミリオンは、その中でも一番弾きやすそうな物を選び取り、それを譜面台に載せた。

「さて、お手並み拝見だな」

そう呟くベルディナはまるで探りを入れるかのように目を細めてその動作を見守っていた。

ミリオンは一度大きく息を吸い込み、そして細かくそれを吐き出すと、両腕の五指を鍵盤に置きまるでそれを叩き付けるかのように腕を振るった。

それは、グラジオン王国に住む物なら誰でも知っているような民謡だった。しかし、その曲調がテンポを僅かに変化させているのだろうか、古臭いその曲の中にどこかモダンな雰囲気内包させるその曲は一瞬にして食堂の誰もを虜にした。

「私、この曲知ってる。お母さんがよく口ずさんでた。懐かしいな」  
ディレイアはその曲の向こう側に台所に立って鼻歌を歌う母の風景を重ねていた。

「お前のお袋は、この国の出身か？」

机に載せた指で調子を取りながらベルディナはそう訪ねた。

「分からない。だけど、そうかもしれない」

それは答えになっていない返答だったが、その言葉はディレイアの心持ちをよく表していた。

曲はリズムカルに時に流れるように、聞く物を全く飽きさせることなく終盤を終え、最後は最高の響きを持って終了した。

『ボルドーミサの先兵』と名付けられた曲は全ての物に哀愁と輝かしい未来を残し、余韻を残すことなく消えていった。中には思わず涙を切らせる物もあり、演奏を終え、聴衆に恭しい挨拶を手向けるミリオンに絶大な拍手と賞賛が与えられた。

おひねりを断るミリオンの服に、その日の稼ぎをまるまるつつこむ者、是非いつばい奢らせてくれと酒瓶を片手に近寄る者、次はこの曲をやってくれと楽譜を掴んで懇願する者と、ミリオンはまるで英雄のような扱いで人々にもみくちやにされていた。

「どうやら、楽師つてのは嘘じゃねえみたいだな。だったら、あの手の豆は何だ？」

と、一人冷めた様子で彼を横目で見るベルディナに、ディレイアは、

「ひょっとして、試したの？」

と耳打ちすると、ベルディナは表情を変えずに答えた。

「当たり前だ。言う事を鵜呑みにするほど俺は優しくねえぜ」

といって、手先から一握の氷を生み出すとそれをグラスに入れ、ウイスキーを咽に注ぎ込んだ。

「ベルディナって、容赦がないんだね。少し怖いよ」

ベルディナは、はは、と笑ってディレイアに目を向けると、あの悪魔のような笑みを浮かべた。

「お前も後数年もすりゃあ、こうなるさ」

「ボクは、そうはなりたくないよ」

気がつくのと声のしないユアを目で追うと、彼女は既にミリオンの

元に居て彼に抱きついているところだった。

「ユアって、本当に素直だね。ボクもあんな風に素直で、綺麗になりたいな」

ベルディナは肩を振るわせると、少し気色の悪い感觸の表情でデイレイアを見、

「ああいうのは、跳ねっ返りっっていうんだよ。それに、”男”がそれを言うとか気持ち悪いぞ、デイレイア」

他人の嘘を見抜くことに長けるベルディナでもその間違いにまだ気がつかないようだ。

ひよっとしたらこの中で一番の詐欺師はボクなんじゃないかと思ったデイレイアは少し愉快そうな笑みを浮かべた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7223f/>

---

聖銀の姫君

2010年10月9日14時04分発行